特定非営利活動法人
日本リザルツ

平成29年度
事業報告書

日本リザルツ
平成30年3月5日作成

07
JULY

2017 年 07 月 02 日

おさらい：華麗なる Gavi まとめ①

以前、スタッフの池田がまとめた華麗なる Gavi まとめを改めて紹介する。Gavi について、「もっとよく知りたい！」という方が最近多いため、今日から何回かに分けて、「Gavi まとめ」をお届けしたいと思う。

もくじ

1.Gavi という名称について
2.Gavi の愉快な仲間たち
3.Gavi の目標
4.何故、Gavi が必要なのか
5.よくある質問「Gavi とユニセフとの違いは？」

では早速始めます。

1.Gavi という名称について

G…Global

A…Alliance

V…Vaccines

I…Immunization

の頭文字を取ったもので、英語の正式名は、「The Global Alliance for Vaccines and Immunization」。日本語訳は、「ワクチンと予防接種のための世界同盟」、日本語の正式名は、「Gavi ワクチンアライアンス」。Gavi の読み方は、「ガビ」で、ちょっと発音良く言うと「ギャビ」となる。

2.Gavi の愉快な仲間たち

Gavi の CEO は、Seth Berkley（セス・バークレー）氏、とってもイケメンだ。

そして、資金調達担当上級マネージャーは、北島千佳氏。ジュネーブで頑張っている！たまに日本にやって来る。

（国際ジャーナル 11 月号より）

日本リザルツはこのお二人と世界のワクチン情勢について情報交換を頻繁に行っている。

3.Gavi の目標

最終的な目標は、世界中の全ての子ども、一人ももらさず、公平に基礎的なワクチン接種が継続的にできる状態にすること。そのために、適切かつ品質の高いワクチンを手頃で持続可能な価格で供給することを目指している。

4.何故、Gavi が必要なのか

世界中で途上国の 1900 万人近い子供たちが、基礎的なワクチン接種ができていない状況にある。（これによって病気が蔓延したり、障害が残ったり、死亡する子どもも…）なのに、

・途上国用のワクチン開発は儲からない

・ワクチン開発は博打のようなもの

↓ワクチン開発よりも治療薬の R＆D の方に力が注がれやすい。他にも様々な理由はあるが、主に以上の理由から、ワクチン開発に対して製薬会社が"引き"気味になってしまう…。そのため、ワクチン開発に対する「何らかのインセンティブ」を提供するメカニズムが必要！そこで、Gavi の登場なる。この何らかのインセンティブについては、シリーズの後半で詳しく書こうと思う。そして、今日は最後によくある質問を…

5.よくある質問「Gavi とユニセフとの違いは？」

ユニセフがあるのに、何故 Gavi が必要なの？という声がたまにある。ユニセフと Gavi とでは、そもそも取り組んでいる内容が違う。Gavi は、ワクチン開発を促進するための資金調達（なるべく長期）のメカニズム、それに対して、現地でのワクチン普及の活動をするのが、ユニセフや WHO だ。

では、本日は時間が来てしまったのでここまで。次回に続く。

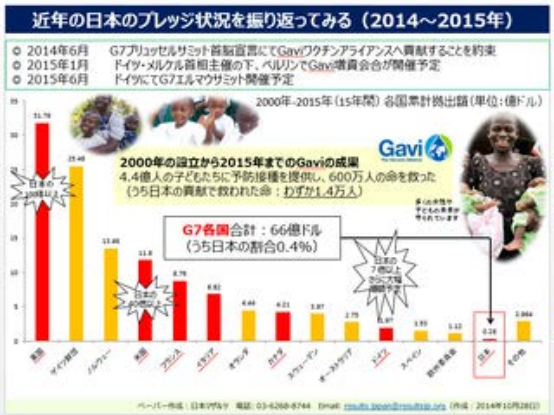
おさらい：華麗なる Gavi まとめ②

最近 Gavi ってどうなっているのというお声を聞きますので、スタッフいけのりの渾身の傑作 Gavi まとめを共有させていただく。今回は、これまで日本リザルツが作成したアドボカシーペーパーの中から、選りすぐりのペーパーをご紹介

【Gavi は投資効果が高い！】

【マーガレット・チャン氏の「予防接種と UHC の関連性」】

【なのに！日本政府の拠出の少なさよ…（涙）】



明日は感動的な魔女の話をお届けする。

おさらい：華麗なる Gavi まとめ③

これまで日本リザルツが作成したアドボカシーペーパーの中から、選りすぐりのペーパーをご紹介しながら、Gavi を知っていただくこのコーナー。今回は、前回の予告にもありました通り、霞が関の魔女（ドーラおばさん？）と言われている代表の白須が、9 年前にしたためた文章を紹介させていただく。（新聞に掲載されたもの）オフィスの掃除中、偶然見つけた文章なのだが、今読んでも、「あ～そうそう」とうなずいてしまうような内容だ。

――

官邸は「健康の外交」のリーダーシップを

――

日本国民の、そして世界の人々の健康をどのように守るか、そこで日本政府がどのような役割を果たしていくべきかについて私見を述べてみたい。健康問題は国境を超える。SARS（重症呼吸器感染症）

や鳥インフルエンザはその好例であろう。また、注目すべきは短期的なアウトブレイク（大流行）だけではない。特にエイズ・結核およびマラリアのいわゆる三大感染症が重要である。

人は必ず結核にかかり、やがてこの国はそれで亡んでいくだろうと思っていたように、今も世界中でこの病気に苦しみ、この寄稿文を書いている 2 時間ほどの間に 370 人もの人たちが次々と命を失っている。この事実は大変重く、世界各国が連携して対応に当たっている。この連携の輪からこぼれ落ちているかに見えるのが日本である。ここ 5 年ほど、国際保健問題への日本のコミットメントは極めて低調であった。たとえば、2004 年から 2 年間における厚生労働省から WHO への寄付金（任意拠出金）はわずか 3000 万ドルであった。同期間における英国の拠出額の約 8 分の 1、ノルウェーの 3 分の 1 にしか過ぎない。また、よく指摘されていることだが、国際機関に勤務する邦人の数は絶望的に少なく、WHO もその例外ではない。WHO に勤務する邦人の専門職員数は、121 名から 166 名を適正数に設定されているところ、2005 年末時点でたったの 41 名でしかなく、長きに渡り低迷している。昨年の 11 月の WHO 事務局長選挙においては、日本から出馬した尾身氏の検討が伝えられたものの、結果は厳しいものであったと言わざるを得ない。実は、このような日本にも、健康問題で世界のイニシアティブを執った時期があった。2000 年の九州・沖縄 G8 サミットの際、議長をつとめた当時の森首相は、感染症対策の重要性を提唱し、2002 年の世界エイズ・結核・マラリア対策基金の設立へとつながった。この業績は、ゲイツ財団をはじめとする民間の力も得つつ、その後の国際保健のトレンドを大きく変えたのである。しかし残念ながら、日本が原動力となったこの世界基金への政府拠出は米国の 4 分の 1 にすぎない。外交上の「得点」は、それが継続されてこそアピールになるというのに、だ。このような一貫性のない政策の「元凶」になっているのは、省庁ごとの縦割り組織である。厚生労働省、外務省がそれぞれ国際保健関係の予算を要求し、バラバラの意図に基づいて政策を立案しているのが現状であり、ただでさえ限られた予算の戦略的な運用を妨げている。健康問題への取り組みは医療だけにとどまらず、日本の立場をアピールしうる貴重な外交資源でもある。これを省庁の課レベル、局レベルでの立案にゆだねるのは実に惜しいことではないか。安倍総理は「アジアにおいて確固たる存在感を示し確保する」と述べているが、その方針のひとつとして「健康の外交」はアジアのみならず世界に大きなインパクトをもたらしうる。そして幸いなことにわが国には健康問題の解決について世界に類を見ないすぐれた経験と知識が蓄積されており、さまざまな優れた人材が活躍している。世界的な健康問題については、国際機関等を通じた多国間協力の枠組が大きな影響力を持っている。現在のように、グラウンドデザインなき「健康の外交」を漫然と続けるのは日本の利益にならない。安倍政権は、官僚に対する強力なイニシアティブを発揮し、国際社会に対する統合的な戦略をさらに練るべきである。

白須紀子

（2007 年 4 月 15 日　新聞掲載原文）

おさらい：華麗なる Gavi まとめ④

皆様、こんばんは。これまで日本リザルツが作成したアドボカシーペーパーの中から、選りすぐりのペーパーをご紹介しながら、Gavi を知っていただくこのコーナー。

（Gavi ワクチンアライアンス CEO セス・バークレー氏）

今回は、Gavi がどのような先進的なワクチンを活用しているのか、企業との素晴らしい協力内容や今後の可能性等をご紹介したいと思う。まずはこれ！

【Gavi が支援するワクチンをきちんと理解してほしい】

次はこちら！

【Gavi ワクチンアライアンスへの拠出のポイント】

【Gavi ワクチンアライアンスと日本企業との協力実績・今後の可能性】

【日本国民への利益・国益に貢献しているGaviワクチン債の仕組み】

ちなみに、エボラ出血熱が流行した際、Gavi のワクチンが大活躍した。
【Gavi は、ワクチンでエボラに立ち向かう唯一の国際機関！】

以上のような Gavi の素晴らしさに感銘を受け、社会奉仕団体を通じて Gavi へ協力している日本国民もたくさんいる。
【日本における Gavi の市民サポーター(ワクチン債・社会奉仕団体)】

これに対して、日本政府からの拠出状況はいかに！？次回は保健外交を声高に叫んでいる日本政府の Gavi に対する拠出情報を知っていただこうと思う。

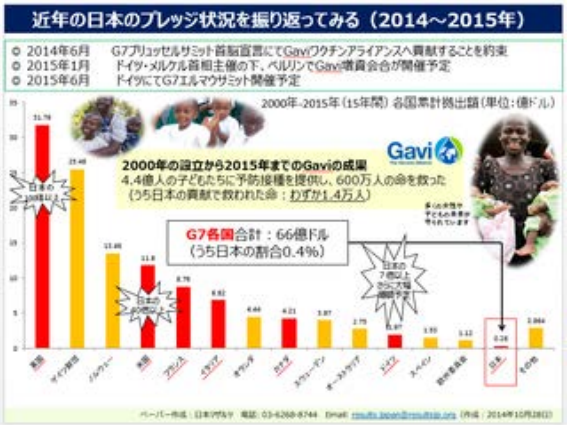
2017 年 07 月 02 日

おさらい；華麗なる Gavi まとめ⑤

あまりにもスタッフ池田がまとめた Gavi まとめが好評だったため、再共有させていただいているこのニュースレター。これで最終回。これまで日本リザルツが作成したアドボカシーペーパーの中から、選りすぐりのペーパーをご紹介しながら、Gavi を知っていただくこのコーナー。最後となる今回は、日本政府の Gavi への拠出状況が一目でわかるアドボカシーペーパーをご紹介

したいと思う！第二回でもご紹介させていただきましたが、おさらいのためまずは再度こちらのペーパー！

【近年の日本のプレッジ状況を振り返ってみる（2014～2015 年）】



右端の方に日本が。少なさに泣けてくる…

次はこちら。

【総額 75 億ドルの拠出金の誓約の中、 G7 の一国として、日本はこのままでいいのかっ！？】

…プレッジゼロ。

そして次はこちら。釣りキチ三平のつぶやきがミソ。（クレジットを入れているものの、怒られたらごめんなさい）

参議院議員・秋野公造先生からのご講義

先週、栄研化学株式会社にて開催された、参議院議員秋野公造先生の講演に参加した。ピロリ菌に関する検査や治療が、胃がん検診や保険適用などの政策決定に反映されるまでの流れ、透析や糖尿病治療を必要とする患者の足病の重症化予防、スナノミ症について等、様々なテーマでお話しいただいた。秋野先生は、医師として臨床や研究に従事した後、厚生労働省でのご経験を得て、参議院議員としてご活躍されている。そのため、困っている患者の思いを踏まえた上で、科学的視点により医療保健政策について説明された。やはり、医療、研究、そして、政策への造詣が深い先生の講義は興味深く、時間もあっという間に過ぎていった。日本リザルツが取り組んでいるケニア共和国のスナノミ症解明に向けてもご協力してくださるとのこと、本当に心強く思った。秋野公造先生、貴重な講義、本当にありがたく思う。

2017 年 07 月 03 日

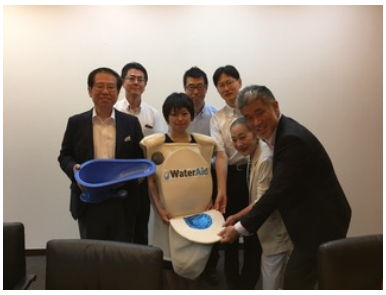
ユニセフ東京事務所の木村所長のご講義

本日、ユニセフ東京事務所の木村泰政所長に日本リザルツまでお越しいただき、水と衛生についての貴重なご講義を頂いた。世界では 3 人に 1 人がトイレのない環境で暮らしており、1 日に 800 人以上の乳幼児が下痢性疾患で亡くなっているらしい。さらに、思春期の女性の場合、トイレがないために学校を中退、退学するなど、健康的、文化的生活の営みにも支障をきたしているとのこと。途上国でのトイレ事業は、ただトイレを設置するという単純な問題ではなく、水、衛生管理、手洗い、下水処理など様々な課題が密接に関連している。そして、野外排泄からの行動変容には、トイレを身近に感じてもらうためのキャンペーン活動も必要だ。さらに、効果的な水・衛生管理、低価格で革新的なイノベーション、平均値では埋もれてしまう最貧困層の方々に焦点を当てる等の様々な戦略とともに、継続的な支援が必要になるとのことであった。日本リザ

ルツでは、著名な方々から講義いただく機会が多く、本当に勉強の日々となっている。

トイレ大革命、いざ発進！

今日はアメリカの独立記念日、この記念すべき日に世界トイレ大革命（World Toilet Innovation）の発足会が行われた。日本リザルツの代表白須と秘書の小鳥が、LIXIL 様、東京大学の渋谷健司教授とともに JICA の戸田隆夫上級審議役を訪問した。発足会では、今後、日本リザルツが力を入れて取り組む「トイレ大革命」について闊達な意見交換がなされた。



トイレのお姉さんを囲んで記念撮影も行った。
今後は LIXIL、JICA、渋谷先生、国連、ウォーターエイドを始めとする NGO が一体となって、世界中にトイレを普及させる取り組みが行われる。日本の知見を活かした大革命、成功させたいと願っている。

2017 年 07 月 04 日

第二回！ケニア視察

日本リザルツの代表白須と秘書の小鳥は 12 日から日本を出国し、ケニアに旅立つ。今回は盛りだくさんの内容。国会議員の先生方+スペシャルゲストと、日本でムーブメントが起きている「スナノミ症」抑止のキャンペーンを実施する。スペシャルゲストは…この方！イボンヌ・チャカチャカさん。

国会議員の先生は…
ミスターアフリカ！日本・アフリカ連合（AU）友好議員連盟会長代行の三原朝彦先生。

日本・アフリカ連合（AU）友好議員連盟所属の山際大志郎先生！

そして、日本銀行出身、トイレ革命に関心を持っていらっしゃる小倉將信先生！

今回の視察が実りのあるものになるといい。

ユニセフ東京事務所長:トイレ大革命に向け講義

先日、ユニセフ東京事務所長の木村泰政さんが、日本リザルツの事務所に来られ、世界のトイレ問題に関して、講義していただいた。私たち日本人にとってトイレはありふれたもので、トイレがなくて困ることが実感できなかったり、あまり関心がなかったりするかと思う。しかし、トイレがないことで起こる問題も世界には多く、衛生的にも、教育的にも影響があり、インドでは、トイレの問題を国民に、特に若者に知らせるために、ウンコちゃんのキャラを作り、アニメを流したり、街頭でイベントを行ったりしている。とても面白い取り組みで、映像を見ていて笑ってしまった。しかし、その点が、人に知ってもらったりアクションを起こしてもらったりする時に、大事な点だと思った。今まで知らなかった内容で、とても勉強になった。

2017 年 07 月 05 日

結核予防-LAMP 法研修

こんにちは、7 月 1 日からお世話になっている、ケニア担当の小川です。
7 月 4 日に久保内事務局長とケニア担当の 2 人(8 月から)で、栃木県の野崎にある栄研化学を訪問し LAMP 法研修を受けてきた。LAMP 法(Loop-mediated isothermal amplificaion) は WHO が推奨する大変優れた結核迅速診断キットだ。研修を受ける前はどのようなものか想像できなかったが、ラボ人である私が、まさかここで自分のスキルが活かせるとは思ってもいなかった。結核菌はバイオセーフティーレベル(BSL)3ですが、スーパーなどで簡単に手に入るマスク、手袋、ブリーチ剤と本検出キットがあれば、基本、事足りると思う。また簡易で検出レベルも高感度、そして、一連の操作は 1 時間弱で、初期に菌を溶解するので安全に検出できる。トレーニングを3回繰り返して受けたが、私に比べて、そうでない方のほうが優れた結果を出していた。未経験者でもすぐに使いこなすことができる優れた診断キットだということを実感した。トレーニング中、大変丁寧にご指導くださった栄研化学のみなさんには感謝している。ケニアでの結核診断方法普及に意欲が湧いてきた。

ナイロビ生活 vol28 ″結核クリニック再塗装編″

結核クリニックの改修は昨年 9 月末に終了しているが、現在の状態は塗装が剥がれ落ちている部分が多く、木材がむき出しになっていた。雨の日のあとは、雨が木材に入り込み、腐食し結核クリニックの建物全体として脆くなってしまっていた。

そのため、再塗装を行っている。

ピカピカだ。

また塗装が剝がれ落ちないように、高品質なインクを使い、防水性のあるニスで二度塗りをしている。

工事は今週の金曜日に終了する予定。この結核クリニックが日本の結核予防支援事業の一環で実施されたことを積極的に伝えていく。

ケニア担当者

ケニアプロジェクト担当を 2 年目は二人体制で行う予定だ。6 月からは冨澤さんがリザルツにジョインし、7 月からは小川さんもジョインされ、ただいま猛特訓中(?)で、先日は那須にある栄研化学さんへ結核診断の LAMP 法の研修に行ってきた。二人とも医学博士で、結核アドボカシー業務には適任であると思われる。日本にいる間に幅広く知識を吸収して、ケニアで活躍されることを期待している。

Rising Poverty Threatens Gains in Fight against TB

Rising poverty, overcrowded public transport, and sprawling Kangemi slums threaten to reverse the gains made in eradicating tuberculosis (TB) in Kenya, experts say.

By ABUTA OGETO

In recent days, the government has released new figures showing a significant decrease in mortality caused by TB.

But medical experts warn the government will never be able to stamp out the disease through a narrow medical approach. Rather, it must tackle the socio-economic problems at the disease's root if it is to avoid a dramatic increase in infections.

"Our slums, our transport, and the poor economic conditions of millions of Kenya make many people prone to the disease," Peris Anyango, a chest disease expert at Kangemi Health Centre told this writer. "TB will continue to shatter the lives of thousands of people as long as no progress is made in these areas."

Despite the challenges, Kenya has managed to make remarkable progress in TB control, according to the Health Ministry.

"Organisation like RESULTS Japan have been very helpful in the fight against TB. Their activities in Kangemi are very very good", Dr. Maillu, Kenya Minister for health said.

The Health minister outlined in recent statements to the media huge drops in the effects of TB from 2010 to 2016: TB incidence, the number of new cases every year, fell from 340 per 100,000 to 180 cases per 100,000. TB prevalence, the total number of infections in any given year, fell from 790 per 100,000 to 240 per 100,000; and the mortality rate, the number of people who die from TB every year, fell from 4 per 100,000 to 1.1 per 100,000, he said.

Kangemi Clinic, where RESULTS Japan runs a TB Clinic offers free medical treatment to TB patients in hopes to eradicate the disease altogether by 2019. “We are working so hard, and we hope in the next two years, we will make a huge impact”, Mr. Riku Shiraishi, Director of RJ Kenya said.

But independent experts say the incidence of TB is far higher than the official numbers of 218,000 new patients every year. In a sign of the skepticism that exists in some camps, one lawmaker asked the Health Ministry to give a full breakdown of TB figures in all counties.There must be immediate action to control these diseases or the present government will be repeating the same mistakes of the governments of the former regime.The number of TB patients in the country’s hospitals, for instance, seems to belie claims that the disease is on the decrease. ″We have 50 beds at the TB section,” said Dr. Joseph Maina, the head of the Kiambu Hospital. “These beds are always full. When a patient is treated, he/she gets out for other people on the waiting list to take their place.”

Challenges

Experts say Kenya’s ability to make progress in TB control hinges on its success in improving the living conditions of slum dwellers; making its public transport less crowded; and reducing poverty.
“Patients – most of them are poor people from the slums – use public transport, which is always busy, and pass the infection on to others very easily,” the Health Minister said. “The nation’s prisons are also hotbeds for infection.”Described in numerous human rights reports as being dirty, unfit for human use, and suffering an extreme lack of health care, Kenya’s prisons, according to insiders, send out to society a large number of TB patients.This is why Health Ministry specialists pay regular visits to the prisons to make sure they do not turn into centres for TB infection.
“We must take firm action to eradicate this disease”, Ms. Noriko Shirau, Executive Director of Results Japan told the Kenyan media. “This is why we need everybody to contribute to this action, or this disease can spread like wildfire,” she warned.

ナイロビ生活 vol29 ″自転車隊編″

ナイロビ生活 vol27 ″自転車購入編″で紹介した、自転車に関連し「出陣式？（自転車の乗り方講習会？）」が開催されていた。

自転車の乗り方を知っているという CHV の方（左）とカンゲミチームのリリアン（右）彼らが講師のような役になり、CHVs に乗り方を教えていた。ケニアでは自転車があまりメジャーな乗り物ではなく、さらにカンゲミのような舗装されていない道を走行する場合は、転倒の恐れもある。

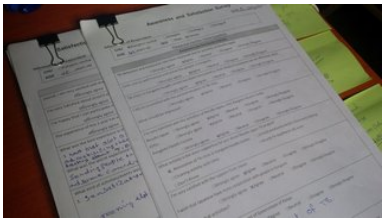
しかし、さすが CHVs！すっかり乗りこなすようになり、カンゲミ住民に対するエンドライン調査に向かって行った。

自転車はカンゲミ保健センターでしっかりと保管され、日本リザルツの職員によって管理される。
原則 1 日単位での貸出となり、その日の夕方には返却され、本日からノートを使い、登録と予約を行い記録もしっかりと取っていく。火曜日、水曜日に開催された CHV 会合にて、エンドライン調査、アンケート回収のお願いをしたところ、快く受け入れてくれた。この調査でより多くのサンプルを回収するために、自転車が大いに役に立ってくれること間違いない。

CHV 会合でアンケートに答える CHV

続々と集まるアンケート用紙

始まって数日だが、続々とアンケートが集まっている。私もこれから、カンゲミの町に出て、アンケートを聞きに回る。



2017 年 07 月 06 日

Lamp 診断法の研修

先日栄研化学さんの那須事業所に伺い、ほぼ一日かけ同社が共同で開発した結核菌等の検出、診断法(Lamp 法)を、実際の手順に従って行う研修を受けてきた。同社生物化学第二研究所の森部長、幸課長並びに職員の方から、それこそ手取り足取り、痰の採取から菌の有無を確認するところまでを、繰り返し行った。建物の入り口で靴をサンダルに履き替え、検査・診断室で防護服、重層のマスク、二重の手袋を身に着ける際は、細菌を扱う心構えをズシリと刻まれた感じがした。想像していた以上に、作業場所の衛生管理を徹底されており、採取した陽性菌が一連の作業中に漏れ、陰性の検体に影響を与えないようにしている。

Lamp 法の診断機器は、その診断に要する時間と、取り扱いの簡便さ、勿論正確さから、昨年 WHO より認定を受けた。現在ケニアで行っている結核予防・啓発活動の支援事業では、地域医療センターにある従来型の検査・診断機器を使っているため、結果を得るまでに保菌者、患者から感染する心配がある。そのため次年度の事業では、この Lamp 法を 3 台導入し、患者の早期発見、感染の拡大防止に大いに貢献してくれるものと期待されている。操作手順はさほど難しくないが、細かな点を確認しながら丁寧に作業を進めていくことが重要だ。現地の担当者になる人たちに、じっくり研修し責任と誇りを持たせ、自立できるよう育てて行きたい。この事業を足場に、設置場所をナイロビ市内に広げ、更にケニア全土にも広げていく構想もある。結核はその人だけを苦しめるだけでなく、一家の稼ぎ手であれば家族が路頭に迷い、子どもでは学校にも行けず、教育を受ける機会も奪われることになる。少しでも患者をなくし、普段の生活が出来る環境を整えてあげたい。

栄養四銃士による栄養会議（特別ゲスト；UNRWA 清田明宏保健局長を迎えて）

本日、日本リザルツにて栄養四銃士（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパン、栄養不良対策行動ネットワーク、日本リザルツ）による栄養会議が開催されました。本日は、特別ゲストとして国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）で保健局長を務める清田明宏先生をお迎えした。栄養四銃士は、栄養改善に関する SDGs 目標達成に向けて、日本が栄養分野で世界をリードできるよう、かつ、国際母子栄養改善議員連盟が定めた『食と栄養のための国家戦略』に基づき一貫した対策がとれるよう、アドボカシー活動をしている。本日は、今年開催される栄養関連の大規模なイベントに関する打合せを行った。国会議員の先生方、アカデミア、国際機関、民間企業からは著名な方々、途上国で活動する当事者スタッフなど、様々な分野からのゲストをお呼びし、実り多いイベントにしていきた

いと思っている。そして後半は、清田先生から国際機関に関する貴重なお話を頂いた。やはり、自分の強みを生かしながら、総合的な観点で仕事をしていくことの重要性を教えて頂いた。

靴送付のお礼状

スナノミ症予防のため、ケニアへ中古の運動靴を送るプロジェクトは現在も進行中で、ありがたいことに毎日靴が届いている。靴の整理はボランティア、インターンの方にも協力をいただいている。靴を送ってくださった方々には、礼状とスナノミ症の写真等の資料をお送りしているが、その礼状もボランティアの方が**手書きで**書いる。本日はその様子の写真をお届けする。

清田明宏保健局長が訪日！

日本リザルツは国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA)のキャンペーン事務局をしています。
UNRWA の保健部門のトップ清田明宏保健局長が 7 月 5 日（水）から 9 日（日）まで訪日し、アドボカシー活動を行った。

昨年秋の訪日時は、安倍昭恵内閣総理大臣夫人を表敬した。
また、訪日されている絶妙なタイミングで、集英社新書 WEB で清田先生の連載が始まり、毎週金曜日に更新されるそうだ（全 5 回）。ガザの現状がよくわかるので、みなさん是非ごらんいただきたい。

ポリオ根絶に向け、グローバルリーダーが連帯

ユニセフから配信されたニュースをご紹介させていただく。4億 5000 万人の子どもたちをポリオから守るため、各国政府やパートナー機関が計 12 億米ドルの支援を表明しました。日本政府は、5,500 万ドルの拠出を表明したそうだ。

第 133 回 GII/IDI に関する外務省/NGO 懇談会

7 月６日（木）、ジョイセフにて第 133 回 GII/IDI に関する外務省/NGO 懇談会が開催された。内閣官房、外務省、財務省、JICA のほか、NGO は１５団体が参加し、白熱した議論が展開された。また、最近開かれた国際会議に関する報告も行われた。個人的には、フィリピンの保健事情の問題が印象的で、フィリピンは経済発展が進んでおり、全体としては国連が支援を行う貧困レベルではないそうだ。しかし、貧富の差が激しく一部の貧しい人たちは必要な保健サービスを受けられない上、外部からも協力を得

られないという現状があるそうだ。会議後は、懇親会が開かれ、他 NGO や政府関係者の方とも親睦を深められ楽しい時間を過ごすことができた。

2017 年 07 月 07 日

釜石生活 75 ～夏の花～

以前にも一度、青葉ビルのあちこちに花を飾ってくださる方がおられると話題にした。今日も、色とりどりの花が訪れる人を元気にしたり、勇気づけたりしてくれている。

飾ってくださる人へ、そこで咲いていてくれるお花に、ありがとう。

アドボカシーペーパー勉強会

5 日(水)、スーパークリエイターの池田紀子先生をお招きし、アドボカシーペーパーの勉強会が行われた。アドボカシーペーパーは、相手に分かりやすく政策提言を伝えるために重要だ。池田先生からは、遊び心を持って、楽しく作ることや、世の中は刻一刻と変化しているため素早く作ること、そして、誤字脱字やフォントの大きさの統一など、仕上げが大切であることを教えていただいた。講義のあとは実際にアドボカシーペーパーをみんなで作成した。

G20 が開幕

7 月 7 日～8 日にかけて、2017 年 G20 ハンブルク・サミット（金融・世界経済に関する首脳会合）が開かれ、日本からは安倍晋三内閣総理大臣が出席した。

今回の G20 は、日本リザルツが力を入れる国際保健分野に関しても大成果があった。骨子は以下の通り。

1.保健システムを世界的に強化するための協調的行動を推進。ユニバーサル・ヘルス・カバレッジが 2030 アジェンダの目標の一つであることを想起。

2.中心的な役割を果たす WHO の改革を奨励。迅速な資金調達メカニズム等の財政的支援を提唱。

3.薬剤耐性について，ワン・ヘルス・アプローチに基づく国別行動計画を実施。

4.抗微生物剤と**結核抑止に向けて**研究開発のための新たな『国際的連携ハブ』の設立を要請。

なんと、薬剤耐性問題に関する記述が重要項目の 1 つとして明記された。しかも、具体的に結核の抑止に向けた研究開発を進めることが明記されている。日本リザルツが力を入れる結核分野において、大きな進捗だ！

実は、G20 に向けて、日本リザルツをはじめとした全世界のリザルツ関係者は、骨子に「薬剤耐性」に関する記述を入れるべく、電話会議を重ねるなど協議を続けてきた。日本リザルツも G20 のシェルパや関係各省庁に働きかけを行うなど地道な努力をしてきた。各国のメンバーの働きかけが形になり、本当に嬉しく思う。G20 をきっかけに薬剤耐性問題、多剤耐性結核に関する取り組みがより良い方向に進んでいくことを期待している。

2017 年 07 月 09 日

【EU FTT アップデート①】マクロン仏大統領、今夏の EU FTT 最終合意へコミット表明するも、「二枚舌」？

欧州 FTT（金融取引税）問題が浮上してきている。欧州 10 カ国による FTT 導入計画は停滞しているが、英離脱後の EU 予算の資金としての議論がはじまり、また気候変動など地球規模課題の資金としてもその必要性が語られている（FTT の国際連帯税的な要素）。こうした EU の動向について、津田久美子氏（北海道大学大学院　法学研究科　博士後期課程）に最新情報について、

ならびにその評価について「EU FTT アップデート」という形で報告していただく。

（田中徹二・グローバル連帯税フォーラム／日本リザルツ理事）

先月 6 月 6 日、マクロン大統領とフランスの NGOs は会合を持った。そこでマクロン大統領は、FTT（金融取引税）を気候変動への取り組みの一つと位置付け、今夏中に EU FTT の最終合意を取り付けることにコミットした。これは、パリ協定からアメリカが離脱することを受け、気候変動への取り組みの重要性を説き、"Make our planet great again" と表明したマクロン大統領へ、NGOs が具体的なコミットメントを要請したことを受けてのことであった。

市民社会は、かつて銀行家でもあったマクロンの FTT へのコミットを高く評価した。しかしながら、同月 22-23 日に開催された欧州理事会（EU サミット）で、マクロンは、イギリスの EU 離脱スケジュールが確定しないかぎり、EU FTT の交渉を進めることは難しい、といった趣旨の発言をしたと報道された。明らかに「今夏中」のコミットとは矛盾しているのである。マクロンや仏政権の本心はまだわからない。おそらくは、来週の 11 日に開催される EU 財務相会合（ECOFIN）にて明らかになる見込みだ。同会合の前には、10 カ国の EU FTT 検討グループが集まることが予定されている。

なぜマクロンは、英離脱（Brexit）との兼ね合いで FTT を捉えているのか。それには、二つの「ポスト Brexit」問題なるものが背景にある。一つは、Brexit 後の「ネクスト・シティ」問題。EU 最大の金融街であったシティ・オブ・ロンドンの地位をめぐって、パリ、フランクフルト、ダブリン、ルクセンブルクなどが誘致合戦を繰り広げている。これに伴い、フランスとドイツでは、「ネクスト・シティ」になれるチャンスにあって FTT は邪魔だ、と熾烈なロビー活動が展開されている。つまりマクロンは、こうした銀行家たちの方に耳を貸したのかもしれない。そこでフランス NGOs は、SNS などを通じてマクロン大統領に「二枚舌」をやめるよう呼びかけている

もう一つの「ポスト Brexit」問題は、EU 財政・予算問題。その詳細は、続編「EU FTT をめぐる近日の動向②」にて。

医薬基盤・健康・栄養研究所　保富先生のご訪問

本日、医薬基盤・健康・栄養研究所の保富康宏先生が日本リザルツを訪問され、結核ワクチンについて講義をしていただいた。ワクチンの基本的なことから、研究の詳細な部分までお話ししていただき、大変勉強になった。世界の 75%の人が結核に感染しており、その後発症するかは不明で、それがワクチン開発を難しくさせているらしい。また、全世界で薬剤耐性結核菌が発見されており、患者の治療が長期化しているそうだ。今回の講義内容が派遣先のケニア現地で活かすことができると良い。

2017 年 07 月 10 日

結核ワクチン開発

本日、医薬基盤・健康・栄養研究所の保富康宏先生をお招きし、結核ワクチンの研究開発について、レクチャーしていただいた。非常に分かり易い説明であり、一部には説明がイラスト的なイメージ画像に

思える内容も有り、初めてのことでも割と理解出来そうであった。世界三大感染症といわれるマラリア、HIV/AIDS そして結核のなかで、ワクチン以外に予防手段がないのが結核だそうだ。ただこの結核菌は感染はしても直ぐには表に出ない。じっと内部に潜んでいるらしい。BCG の開発でも結核菌の反応が遅いため、完成まで 13 年を要したらしい。昨今多剤耐性結核菌が問題となり、更に完治までの期間が長くなった。ワクチン開発に携わる保富先生の大変さを改めて感じた。普段はおとなしそうな、しかし世界の結核発症数、死亡者数の元凶の恐ろしさを知らしめ、予防・啓発活動の必要性を新たにした。

釜石生活 76 ～離婚・再婚　親の都合と子どもの気持ち 学習会～

7 月 8 日（土）「離婚・再婚　親の都合と子どもの気持ち 学習会」を開催した。主任児童委員ほか、約 20 名の方に参加いただいた。最初に私から、2015 年の人口動態統計から婚姻数、離婚数を全国と釜石を対比して伝えたり、釜石の特色や傾向として感じることを話した。その後、臨床心理士の石垣秀之先生から、養育費と面会交流について話していただいた。先進諸国の離婚制度、児童の権利条約、「父母の葛藤」が最も子どもを傷つけるということ、離婚に際して何を取り決めておくべきか、養育費の計算方法等について、法務省資料、兵庫県明石市資料等を使用して説明された。

離婚・再婚は、個人の問題でありながら、ひとり親家庭の貧困、子どもの非行等の社会の問題と密接に関わっていると常々思っていたが、石垣先生も、「子どもの不登校などの問題も、父母の離婚、実の父との交流断絶、継父の暴力等の問題が原因となるなど関係し合って表出したのが不登校であったりする。そのため、子どもの問題においては、（離婚、再婚、面会交流を含めた）家庭環境に留意する必要がある」と言われたのが一番印象に残り、共感できると感じた。

結核予防に向けて栄養改善の必要性

今、世界中でどれくらいの人々が栄養不良に苦しんでいるか知っていますか。世界の人口 70 億人のうち、約 20 億の人々は栄養不良に苦しんでいる。そして、5 歳未満の子どもの場合、7 人に 1.5 人は栄養不足から身長が伸びないなどの発育の問題を抱えている。身長が伸びないこどもの治療は長期に及び、そのため、医療が不十分な途上国では、十分な治療を受けることができる子どもの数は限られてしまう。この問題を解決するためには、子どもが生まれる前、つまり、女性の妊娠時、または、妊娠前の栄養改善が必要とも言われている。

日本リザルツが結核プロジェクトを行っているケニアでも、栄養不良の問題が蔓延しており、5 歳未満の子どもの 4 人に 1 人は、栄養不良により発育に問題を抱えていると言われている。栄養不良の改善は、自己免疫力を高め、結核を含めた感染症への罹患のリスクを下げるとともに、知育の発達や労働

生産性へも良好な影響を及ぼすと考えられている。したがって、栄養改善への介入は、結核の予防のみならず、社会経済的な側面からも重要になる。日本リザルツは、ケニアでの結核の迅速検査機器の導入や住民への啓発活動とともに、子どもの結核予防に向けて 10 代女性への栄養に関するアプローチも考えている。詳細は追って紹介させて頂くが、皆様のお力をお借りしながら、ケニアで意義のあるプロジェクトを行っていきたいと考えている。

日本リザルツ事務所へお客様が続々！

日本リザルツの事務所には毎日のようにどなたかが訪問されている。先週は、3 日（月）にユニセフ東京事務所の木村泰政所長、5 日（水）にはアドボカシーペーパー作成についての講師として池田紀子氏、7 日（金）には国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）で保健局長を務める清田明宏先生と栄養四銃士（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパン、栄養不良対策行動ネットワーク）の方達、昨日は医薬基盤・健康・栄養研究所の保富康宏先生と多彩な顔触れだ。おもてなしとしては、ケニアンティー、緑茶、コーヒー等になるが、緑茶については、代表の白須が大の緑茶好きのため、スタッフも美味しい緑茶がいれられるようになった。

つなみ募金7．11

本日は、総勢 8 人で津波募金を行った。

道を歩く人も、we love Japan の T シャツに注目していただいたことかと思う。そして、みなで声を出して呼びかけることで、今日が東日本大震災から 6 年と 4 か月であることを、思い出していただけたと願っている。

それぞれの 3.11 かと思うが、人の命の尊さや人との繋がりが大事であるということは、共通することかと思う。今いる場所で、自分にできることを頑張ろう。

2017 年 07 月 11 日

ナイロビ生活 vol30 ″学校保健総集編″

6 月 27 日-6 月 29 日、3 日間にわたりカンゲミ地域にある小学校で「School Health（学校保健）」を開催した。今回はその詳細をお伝えしたいと思う。

School Health（学校保健）とはカンゲミ地域の子どもたち（小学生）を対象にし CHVs が中心となって「結核啓発活動」を行うものだ。まずは全校生徒に集まってもらい、「結核とは何か」をゆっくりと話していく。「結核って何か知っている人？」と聞くと、ほとんどの生徒が手を挙げ、上級生は「結核は…」と話すことができていた。しかし、その回答の一部には誤りがあり（「結核患者は必ず HIV/AIDS にかかっている」「完治することはなく、一生涯薬を服用しなければならない」など）、CHVs が正しい知識を伝える場面があった。正しい知識を知っていないと、治療に訪れなかったり、偏見につながり、正しい知識を伝えることが大変必要であることを再認識した。

CHVs にはできるだけ簡単な言葉で伝えるようにお願いした。また小学 1 年生も参加しているため、常に関心が行くように工夫する必要があった。（私が行くとどうしても目立ってしまう….）

一通り、授業が終わると、上級生を対象に簡単なテストを行った。

6 問の Yes/No の質問だ。

1　結核患者は完治する

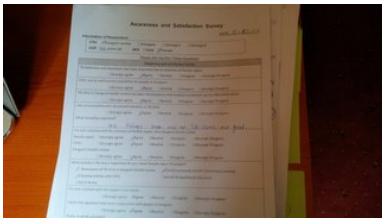
2　結核患者は必ず HIV/AIDS にも罹っている

3　薬を服用しないと、結核で死亡する可能性がある

4　結核治療には最低でも 1 年かかる

5　結核治療中に重度の吐き気、嘔吐、皮膚発疹がある場合でも、薬の服用は続けるべきだ

6　薬を服用し、回復したと感じたら、服用を止めるべきだ



事務所には大量のテストがある。CHV　はその場で丸付けをして、間違っていれば再度教えていく。

その結果、9000 名以上の子どもたちが、満点を獲得している。

以下、協力いただいた学校。

①Hamomi Pri School (268)

2 Kanyorosha Pri School (489)

3 Wise Doride Pro School (382)

4 Kiara Pri School (508)

5 Kangemi Youth School (1,500)

6 Kangemi Advest School (569)

7 Akiba Pri & Sec School (2,600)

8 Edward Sec School (462)

9 Oasis Academy (581)

10 Rawa Kids School (506)

11 Wmaja Academy (636)

12 Bright Star Academy (533)

合計で 12 校、9,028 名の子どもたちだ。

学校長に話を聞くと、「このような感染症は身近にあるが、カリキュラムには積極的に組み込まれず、政府の見解では家庭内で学習させることになっているらしい。それでは、間違った情報が拡散されていく危険性がある。実際にそうなっていると感じている。また、学校内でそのような企画をしようと思っていても、感染症に対して深い知識を持った先生方はおらず、実現が難しかった。このような企画は大変うれしい、続けて欲しい。」とおっしゃっていた。

また、徐々に集まりだしているカンゲミ住民を対象にした「認知度・満足度調査」の「どのような活動を望むか」と言う項目には「School outreach」という今回のような学校を対象とした活動を望む声がたくさんある。

[ニュース]医療保険の導入支援へ

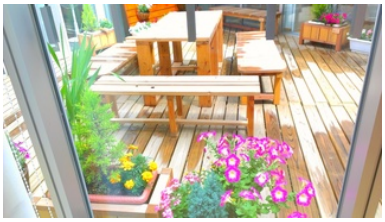
12 日(水)付の朝日新聞に興味深いニュースが載っていた。

◇医療保険の導入支援

アフリカやアジア各国で日本のような医療保険制度を導入できるよう支援するため、政府は今年１２月、世界銀行や世界保健機関（WHO）、途上国の保健担当者を集めた会合を東京都内で開く。世銀やWHOと連携し、国民皆保険の導入を視野にノウハウの伝授や資金援助を進める。 対象はシエラレオネやガーナ、セネガル、ベトナムやカンボジアなど１０カ国。現地のニーズにあわせて、国民の栄養状態など基礎データの収集や財源となる税の集め方、社会保険料を元手にした社会保障制度づくりなどを支援していく。会議では日本リザルツが力を入れる栄養改善に関しても話されるそうだ。日本のノウハウを活かして、実りのある会議がなされることを期待している。

釜石生活 77 ～青葉ビル～

「青葉通り こどもの相談室」が入っている「青葉ビル」の天井には、7 月に入ってからカラフルなオブジェが下げられ賑やかだ。



これは七夕の飾りつけで、旧暦の七夕まで飾るそうだ。この青葉ビルは、市営住宅(50 戸)と、公民館機能を持つ公共施設(1 階:市民交流・活動スペース、研修室)をあわせたビルで平成 20 年 4 月 1 日オープンした。震災により 1 階部分が被災したが、平成 24 年 4 月 25 日リニューアルオープンしている。
この青葉ビルで、私が好きな空間は、ウッドデッキの中庭。

きれいに手入れされている。
そして、相談室の前には、新しいイーゼルが！

震災直後から、日本リザルツの活動を支え、力を貸してくださっている木下美喜夫さんのお手製イーゼル。小学校帰りの子どもたちが興味津々で集まってくるのが楽しみだ。

議員会館への訪問

昨年ケニアを視察されたあべ俊子先生と秋野公造先生に、視察の様子を記録した DVD をお届けするため、議員会館へ行ってきた。一人での訪問は初めてだったので緊張したが、みなさん笑顔で温かく迎え入れてくださった。徐々にインターンの仕事にも慣れ、書類の余白の微調整や、お茶の入れ方一つでも丁寧に心がけることを学び、日々鍛えられている。来年から、社会人としての一歩を堂々と踏み出せるように、やれることは臆せず何でも挑戦して頑張っていく。

釜石生活 78 ～ゆるっと～

毎月第 2 木曜日に、釜石市内で子どもの支援活動を行う団体が集まりミーティングを行っている。
おもに情報交換だが、困っていることなども分かち合い、知恵を出し合ったりもする。子ども課も、ゆるっとのメンバーだ。(私は、子ども課に紹介いただいて、参加するようになった。)今日、そのゆるっとで、川遊びが話題になった。釜石には甲子川や鵜住居川という大きな川があり、場所によっては浅くて川

遊びにもってこいのところもあるのに、子どもが遊んでいるのを見たことがなかった。私が小学生の頃は、男の子は川でザリガニを捕ったりしていましたし、女の子も水辺まで行って遊んでいた。今は、子どもだけで川遊びをすることは禁止されているそうだ。そこで、NPO などが川遊びをするイベントを企画したりすると、人気になるそうだ。天然のウォータースライダーもある上流の方で遊ぶらしく、安全管理についても話題になった。スタッフが救命救急の講習を受けていること、“川遊びの達人”をゲストに迎え、川遊びの前にオリエンテーションをしっかり行うこと、（川の水は冷たいので）川に入る前に準備運動を行うことなどの安全管理を行ったうえで、川遊びを満喫してほしいと思う。川の楽しさを通して、地域を愛する心を育み、自然と共に生きる力を培ってほしい。こういうめいっぱい体を動かして遊ぶカテゴリーは、やりたくても体がついていかないので（苦笑）、若い方々にお任せして、クラフトや調理実習やそば打ちなどの分野でがんばりたいと思う。

2017 年 07 月 13 日

経理担当者意見交換会

本日は、AAR Japan さんの呼びかけによる NGO の経理担当者の意見交換会があり、出席してきた。20 団体ほどの経理担当者が集まり、中には地方からいらした方もおられた。経理担当者の悩みはいずこも同様で、経理システムは何がいいのか、海外事務所の会計は本部の会計にどのように取り込んでいるのかなど、20 点以上の悩みが共有された。今後メーリングリストの共有でざっくばらんな質問や回答を共有できたらよいと皆さん考えておられた。経理担当者は、自分から積極的に話をされる方は少ない傾向があるが、会議が終了する頃にはだんだん打ち解けて、名刺交換の時にはあちこちで話し込む様子が見られた。経理担当者が一人で悩まず、同じ状況にある他団体の経理担当者と（話せる範囲で）話すことはいいことだと思う。

ケニアの社会事情

ケニア渡航に向け、最近、ケニアの社会事情について調べている。もちろん、8 月の大統領選挙に向けたニュースが多くを占めているが、その中で気になったニュースをご紹介する。
ケニアでは、若者の自殺が深刻化し、社会問題になっているそうだ。WHO の報告によると、世界 32 ヵ国（中所得国、低所得国）の中で、ケニアの若者の自殺率（自殺企図を含む）は第 2 であり、ケニア政府も対策に乗り出しているとのこと。自殺の理由として、HIV/AIDS への感染、身体の病気、性的虐待、家庭内暴力、貧困、失業、日々の食事が満足に取れないこと等が挙げられるそうだ。途上国では、疾病からの回復により働く力は回復するが、すぐに生活自体が改善する訳ではない。したがって、多くの機関と連携することで、健康を含めた生活全般に焦点を当てていく必要があることを実感した。日本リザルツがケニアで実施予定の第 2 期結核プロジェクトでは、結核から回復後の生活も視野に入れ、多くの方々と協力し合いながらプロジェクトを運営していきたいと思う。

公明新聞の記事

本日の公明新聞朝刊の 4 面に、日本リザルツのスタッフ長坂の投稿記事が掲載された。

私はこう思う

東京都千代田区　長坂　優子

ケニアに運動靴を

恐ろしい感染症から

子どもの生命を守る

全国から心温まるメッセージと共にオフィスには毎日、たくさんの靴が届けられている。
皆様の心強いご支援に感謝の気持ちでいっぱいだ。

日本リザルツの活動がケニアで記事に

現在、代表の白須と長坂がケニアに滞在している。日本リザルツが支援するカンゲミ医療センターの活動について記事になった。結核は、スラムでの課題はもちろんですが、刑務所も温床になっていることを初めて知った。また、結核は、人権問題にも関与しており、刑務所内の環境悪化が、感染者を発生させ、刑務所内感染を広め、結果的に社会にも広めるとのこと。日々、結核に関して新しい知識を吸収している。

MS YVONNE CHAKA CHAKA TO VISIT ESSUMBA VILLAGE

BY ABUTA OGETO

Popular South African musician, Ms. Yvonne Chaka Chaka will be in Kenya to popularize efforts to fight infectious diseases in Kenya. The songstress will be performing to, and treating people with jiggers in the tunga peteran infested Essumba village. Yvonne is also involved in the fight against TB, Malaria, Polio and HIV Aids.

Her itinerary comes at a time when RESULTS Japan in serious efforts to eradicate jiggers, which have visited a lot of misery and suffering on the people of the poor western Kenya villages.
She is the ambassador of Global Fund and this visit has the meaning of confirming the status of malaria, tuberculosis, and AIDS.

Yvonne is the ambassador of Global Fund. Apart from the jigger treatment event, her visit seeks to ascertain the status of TB, Malaria and HIV Aids ailments in Kenya.

Located 60 kilometres from Kisumu, Kenya, the village does not have clean water, and lacks a hospital facility. The people have to walk several kilometres to get water to drink. Further, due to lack of medical facilities, they have to seek medical attention at Emuhaya hospital, 15 kilometres away.

The Sunday, 16th July event will be graced by the Executive Director, Results Japan, Ms. Noriko Shirasu, JICA delegation, Embassy delegation, as well as other stakeholders who support the projects being carried out by the NGO.

Ms. Chaka Chaka will fly out after the event, on 16th July, 2017.

2017 年 07 月 14 日

マクロン大統領＞FTT（金融取引税）導入「最後までやり遂げる」、しかし…

マクロン仏大統領は、欧州（10 カ国）FTT につき、その導入計画を「最後までやり遂げる」と言明した、とロイター通信は報じている。一方で、10 日予定されていた 10 カ国の財務相会合は年末まで延期されたようだ。背景として、ドイツの総選挙が 9 月末に行われ、本格的に政府が形成されるのは 11 月になり、それからでないと物事が進まないという。しかし、実際のところ、ドイツならびにフランス政府がロンドン・シティから金融機関を誘致しようとして FTT 推進を躊躇しているというのが本音でしょう。
また、フランスは 7 月 7 日フィリップ首相が「フランス独自の FTT」の拡大を取りやめると記者発表した。この結果、フランスの ODA（政府開発援助）の 22%が FTT によって資金を得ていますが、このままでは ODA の対 GNI 比のさらなる低下が懸念されている。 ともあれ、多分に腰が引けた内容だが、マクロン大統領の「最後までやり遂げる」言明は以下の通りで、大統領の言動に注目していきましょう。

【ロイター】金融取引税、意味と実効性ある限り導入推進＝フランス大統領

2017 年 07 月 14 日

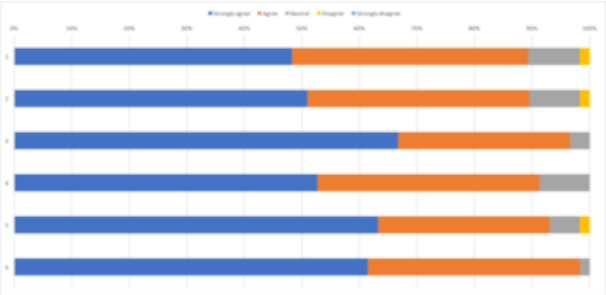
［パリ　13日　ロイター］ － フランスのマクロン大統領は、13日付の仏紙ウエスト・フランスに掲載されたインタビュー記事で、ユーロ圏10カ国が基本合意している金融取引税（FTT）について、意味と実効性がある限り導入を推進する考えを表明した。FTT導入はフランスとドイツが主導だが、対象となる金融商品や税率をめぐり各国の意見の隔たりが大きく、2011年以降、協議は難航している。

マクロン氏は、FTT導入を「最後までやり遂げる」と言明。欧州議会の一部議員やNGOから批判の声

が上がるが、「この件では一切引き下がらない」と述べた。ただ、EU離脱後の英国がEU域内の金融市場へのアクセスを確保するかどうかで状況は変わってくると指摘。FTTが適用されない英国に金融機関が拠点を移すことが想定されると説明した。

ナイロビ生活 vol31 ″CHV の満足度調査編″

今月の CHV 月例会合で実施した「CHV の満足度調査」の分析結果を簡単に紹介する。
CHV（コミュニティーヘルスボランティア）は元結核患者を中心として、結核予防・対策に関して高い意識を持ってすでに活動しているカンゲミ住民。日本リザルツでは、本事業で 80 名の CHV を対象とした①住民に向けた結核予防・啓発活動②結核の偏見、差別の軽減及び対処③一般市民・現地住民への啓発活動④各ステークホルダーへのスラム居住区住民の結核に関する実情・ニーズ等の情報提供・プレゼン、以上 4 点に関するトレーニングを実施した。トレーニング後には各 CHV に年間活動計画を作成し、我々はそれに対しモニタリングを実施している。また毎月「CHV 会合」を開催して活動進捗報告をしてもらっている。私も彼らとなんども会い、直接話して、信頼関係を築いてきた。CHVs はプロジェクトの中心で、彼らが本事業に対しどのような感情を抱いているのか、その結果は非常に重要だ。
そこで全 CHV を対象に「CHV の満足度調査」を実施した。アブタが実施したグループインタビューに参加した 57 名の回答を元に分析した。自由記述式の項目はスワヒリ語で記入されているものが多々あるため、後ほど..
アンケート項目は以下の通り。
1. 私はこのプロジェクトに非常に満足している
2.私はプロジェクト計画に非常に満足しています
3.私はプロジェクトに参加することができ、とても嬉しいです
4.この 1 年間の経験は、私の将来の人生にプラスの影響を与えます
5.CHV 間で「絆」が生まれたと思う
6.私は積極的に来年に参加したい



青が「強く同意する」オレンジが「同意する」を示している。この表を見るだけで、彼らが強く満足しているしていることがわかる。
細かい数値は以下の通り。

Satisfaction Survey for CHVs	Response(%)					N
	Strongly agree	Agree	Neutral	Disagree	Strongly disagree	
Overall, I am very satisfied with the way performed(a performing) on this project	27	23	1	1	0	56
	48%	41%	9%	2%	0%	100%
I am very satisfied about project planning	29	22	1	1	0	57
	51%	39%	9%	2%	0%	100%
I am very happy that I can participate in the project	38	17	2	0	0	57
	67%	30%	4%	0%	0%	100%
The experience of this 1 year has a positive influence on my future life	30	22	5	0	0	57
	53%	39%	9%	0%	0%	100%
I think that CHVs were able to unite with each other better than ever before	36	17	3	1	0	57
	63%	30%	5%	2%	0%	100%
I will actively participate in the next year	35	21	1	0	0	57
	61%	37%	2%	0%	0%	100%

また自由記述式で「次年度に向けて企画を提案してください」と言う項目を作り、CHVs が考える企画を募ってみた。その項目には（ざっと見た感じですが…）

- 学校ベースのアウトリーチ活動
- 清掃活動
- ロードショー（一人の CHV に聞くと、カンゲミ地域内でイベントを開催しカンゲミ住民が自由に参加できるもの、だそうだ）

これらが多いように感じた。今後もさらに分析をしていき、報告する。

2017 年 07 月 15 日

山際先生と感染症患者さんの声を聴いてきました

日本リザルツの代表白須と秘書の小鳥は、7 月 12 日に日本を出国し、ケニアに滞在している。

7 月 15 日、元経済産業副大臣で日本・アフリカ連合（AU）友好議員連盟所属の山際大志郎先生とともに、ケニアの最貧困地域であるエスンバ村の感染症患者さんの生の声を聴きに行った。ケニアではグローバル・ファンドの拠出金の使途が課題となっている。エスンバ村では、HIV/AIDS 患者にしか薬が提供されていない。結核、マラリア、コレラ、ポリオ、そして、スナノミ症の患者は援助を受けることができず、亡くなっているのが現状だ。今日は山際先生と1軒1軒、感染症患者さんを訪問する。お土産は日本の美味しいキャンディだ。前回、昨年 12 月に国会議員の先生方がお会いしたときよりも、みなさん表情が明るく、元気そうな印象を受けた。なんと以前の視察で、足が壊死して動けなかった 18 歳の女の子はすっかり元気になっていた！また、1 人 1 人の患者さんの話に真剣に耳を傾ける山際先生の姿に感銘を受けた。気さくなお人柄の山際先生、ケニアの子どもたちともすっかり仲良しになられていた。

さらに道中では、獣医学者らしい一面も。ケニアの動物ともお友達になられたようだ。最後は、現地 NGO エドワードのお宅でケニアの郷土料理とケニアンティーを堪能した。明日はイボンヌ・チャカチャカさんも加わり、一大キャンペーンを実施予定、みなさん明日も楽しみにしていて下さい。

2017 年 07 月 16 日

[速報]イボンヌさん到着

たった今、イボンヌ・チャカチャカさんがケニアにあるキスム国際空港に到着された。早速、メディアの取材を受けるなど、大人気だ。報道陣から「旅の目的は？」と聞かれ、「グローバル・ファンド関して、拠出金が感染症患者に行き届いているか、患者の生の声を聞いてきたい」と仰った。イボンヌさんは南アフリカの歌手で、グローバル・ファンド、Gavi ワクチンアライアンス、IFNA のチャンピオンなどを務められるなど、子どもと女性の健康に関して積極的に活動されている。イボンヌさん効果で、今回のイベントはますます盛り上がりそうだ。

山際先生、イボンヌさんと感染症抑止イベントを行いました

7 月 16 日、日本リザルツは元経済産業副大臣の山際大志郎先生と南アフリカの歌姫イボンヌ・チャカチャカさんとともに感染症抑止に向けたイベントを行った。ケニアの風土病、スナノミ症の治療を見学した。イボンヌさん、山際先生も息を飲んで治療風景を見守っていた。私も看護師チャリティの治療をサ

ポートした。小さな女の子の足からスナノミがどんどん出てきて、びっくりした。涙を流しつつ、痛いの必死で我慢しながら、治療を受ける姿が印象的で、私も一生懸命声をかけて、彼女のサポートをした。今回は電通さんが集めて下さった運動靴を寄贈した。たくさんの靴を集めて下さった電通さん、有難うございました。イベントには多くのメディアも駆けつけ、日本リザルツケニアオフィスのアブタさんが、コーディネートし、およそ 6 社の取材を受けた。

ケニアはグローバル・ファンドの享受国。それにも拘わらず、エスンバ村の子どもたちのような最貧困層には、そのお金が行き届いていないのが現状だ。今回は結核、マラリアで家族を亡くした奥様のお宅を訪問した。イボンヌさんも、「すべての人が健やかに笑顔で暮らす社会を目指して欲しい」とメディアに訴えていた。明日は小倉將信先生も加わり、一層、視察が盛り上がる。

2017 年 07 月 17 日

エスンバ村視察 3 日目

日本リザルツ代表の白須と秘書小鳥は、7 月 12 日からケニアに滞在し、国会議員の先生方とアドボカシー活動を行っている。今日（7 月 17 日）は、山際大志郎先生、イボンヌ・チャカチャカさんに加え、小倉將信先生が視察合流した。

小倉先生はキューバ視察から強硬スケジュールでケニアへ駆けつけてくださり、空港でイボンヌさんと山際先生が小倉先生をお出迎えした。山際先生、小倉先生はその後、ヴィクトリア湖周辺の感染症について視察を行った。午後からは小倉先生とエスンバ村の小学校へ。スナノミ症患者の治療キャンペーンの見学をした。心優しい小倉先生。なんと 50 足近い運動靴と、お菓子を子どもたちに寄贈してくださった。また、子どもたちに靴を一足一足履かせて下さった。お菓子のごみはみんな回収。普段から身の回りをきれいにすることが、感染症抑止につながることを呼びかけた。以前、スナノミ症治療キャンペーンにきてくれた患者さん。ボロボロだった足がこんなにきれいになり、元気な姿が見られて嬉しかった。

2017 年 07 月 18 日

「フレンドリーペアレントルール」適用ならず

14 日、各報道機関にて、フレンドリーペアレントルールの適用で注目を集めた親権裁判の結果が出た。以下は、産経新聞の一文。

「長女の親権をめぐり、同居の妻と別居の夫のどちらを親権者にするかが争われた離婚訴訟の上告審で、最高裁第2小法廷（鬼丸かおる裁判長）は、夫側の上告を受理しない決定をした。「年間100日程度」の面会を提案した夫に親権を認めず、逆転敗訴とした2審東京高裁判決が確定した。決定は12日付。4裁判官全員一致の結論。」

月に 1 度、2 時間程度しか会えない親もそうですし、子どもの気持ちが気になります。

新聞記事を見てのお問合せ

7 月 14 日の公明新聞に掲載された日本リザルツのスナノミ症根絶キャンペーンの記事を読んだ方々から、電話での問合せを頂いた。『アフリカの子どもたちのために何かしたいと思いながらきっかけがなかった』、『運動靴を送る活動なら今の自分にできそうです』等の好意的なコメントを頂いた。なかには、『オフィスが近いので、空いた時間に日本リザルツまで運動靴を届けます』と言って下さった方もおられた。関心を示してくださった皆様、本当にありがとうございます。

岸田外相 SDGs 演説で 10 億ドル規模の支援を表明

若年層教育・保健
日本10億ドル支援
岸田外相 SDGs演説
2030
SDGsで変える
「SDGs版PPAP」
ピコ太郎さん
NY国連で披露

昨日の朝日新聞の夕刊に掲載されていた記事。
岸田外相がニューヨークの国連本部で開かれた持続可能な開発目標(SDGs)に関する「政治フォーラム」で演説し、子どもや若年層の教育、保健、格差の是正などに取り組むため 2018 年までに 10 億ドル規模の支援を表明した。

この記事には、「SDGs 版 PPAP」も紹介されている。世界的にヒットしたピコ太郎さんの PPAP になぞらえており、発想がおもしろくていいと思う。

釜石生活 79 ～かまリンぬりえ～

先日、たまたま相談室に来てくれたお子さんが、「かまリンぬりえ」に挑戦してくれたので、イーゼルに貼り出した。

くまモンは、時間が足りなくなったので、「お家に持って帰ってぬりえしてくる！」と、持ち帰られた。作品で事務所の壁がいっぱいになると賑やかでいい。相談に、というだけでなく、子どもたちが気軽に遊びに立ち寄れる相談室でありたいと思う。
【かまリン】
釜石市の頭文字「か」をモチーフに、上を向いて元気に未来へ駆ける釜石市民を表している。 右手には高炉の熱い炎、左手には市の花「はまゆり」を手に、美しい海や魚、緑豊かな自然をシンボライズし、いきいきと明日に向かって飛躍する”いきいき釜石　元気な釜石”のイメージを表現している。

国際連合パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA)-10 年後の報告書

日本リザルツがキャンペーン事務所を務める UNRWA が、取り組んでいるガザについての報告書が発行されている。ハマスのガザ占拠 10 年後についての報告書。
2012 年の報告書以来、ガザ人口は順調に増え続けているそうだ。一方で、人口拡大に伴って、インフラ、医療全般や教師の充実が追いついていないこと。農業も輸出規制が緩和されない限り自足されないだろうと述べられている。また、児童や女性への人権侵害も問題視されている。

リザルツの国際会議

世界のリザルツが集まる International Conference (IC) が、今週から米国ワシントンで開始される。全体の総会は 23 日の開会式を皮切りに、各分野、グループの会合(ワークショップ)が 25 日まで続く。普段は電話会議やスカイプで実際に顔を合わすことがないが、直接会って議論したり、雑談することで更に近い存在になるのではないかと思う。今後のリザルツ全体の方針、戦略が打ち出されると思うが、アドボカシーを唱えるだけでなく、貧困、疾病、栄養などに苦しむ人々の実情を、お互いの共通認識として最低限持っていたい。日本リザルツはケニア・ナイロビ市内スラム居住区での結核予防・啓発活動や最貧地でのスナノミ症予防で、現地住民の窮状に接しているだけに、発信力はあると考えている。実はこう述べながらも、今回日本リザルツから現地に乗り込み多くの Results メンバーに会い、会合に出席してかけがえのない、しかし苦労も伴う経験をしてくるのは、うら若き女性である。彼女には面倒を掛けさせ申し訳ないが、必ず何か実のあるものを持ち帰ってくれると、信じている。気を付けて、そして貪欲に。

2017 年 07 月 19 日

小倉先生とカンゲミ地区を訪問しました

日本リザルツの代表白須と秘書小鳥は 7 月 12 日に日本を出国し、国会議員の先生、そしてイボンヌ・チャカチャカさんとアドボカシーを行っている。7 月 18 日は、小倉将信先生と一緒に、日本リザルツが実施する結核アドボカシープロジェクトの視察を行った。在ケニア日本国大使館の小林徳光一等書記官も同行された。まずは医療ボランティアとの意見交換です。心優しい小倉先生。CHVs の意見を 1 つ 1 つ丁寧に聞いて下さった。特に結核罹患経験のある方や結核で家族を亡くされた方の話に真剣に耳を傾けておられた。カンゲミ地区を効率的に廻れるよう購入した自転車を前に記念撮影。爽やかだ。

その後、先生は、結核患者さんと日本リザルツが実施する清掃活動を視察され、先生は子どもたちからも大人気だった。視察後、「日本のように掃除をする習慣が重要」と仰っているのが印象的だった。お忙しい中、日本リザルツの活動をご覧下さり、本当にありがとうございました。小倉先生のケニア視察は 21 日まで続く。

日本リザルツ新聞 10 号の編集会議

日本リザルツ新聞 10 号を担当することになり、昨日は担当者間の打合せを行った。改めて日本リザルツの 4 月から 7 月までの活動記録を見直してみると、様々なイベントや活動が目白押しだ。
4 月は、2016 年世界栄養報告セミナー開催、世界銀行春季セミナーへの参加、熊本・釜石・ガザなど被さい地を結ぶくまモン塗り絵展覧会。
5 月は、IFNA パートナーシップ会議での NGO 代表スピーチ。
6 月は、スナノミ症キャンペーンのため約 2500 足の運動靴をケニアに輸送したこと、輸送に協力頂いたケニア大使館・エチオピア航空への感謝状贈呈式。
7 月は、第 2 次ケニア結核プロジェクトの準備（LAMP 法講習会、結核ワクチンの勉強会）、世界トイレ大革命の準備、そして、ケニアでのスナノミ症キャンペーン。
また、10 月には GGG+フォーラム開催も控えている。
リザルツの活動を皆様に知って頂くために、どのような新聞にしたらよいか知恵を絞っているところだ。

2017 年 07 月 20 日

ガザ支援アドボカシーペーパー作成

日本リザルツに来て早3週間。ガザ支援のアドボカシーペーパーを作成することになった。今回は UNRWA が取り組んでいるガザの支援のアピール。
2012 年のレポートでは、紛争により家やインフラなどが壊滅状態となり、ガザは住める場所なのかと疑問視されていたが、2017 年に報告されたレポートでは見事に人口増加に成功し、未来が明るいものとなってきた。その一方で、急速な人口増加にインフラや医療などが追いついていないとのことで、その面での支援が必要だそうだ。日本リザルツも 2016 年度に日本からの支援として、ガザ地区 4 カ所の診療所にリハビリ器具・運動器具を設置している。
資料を読み込んでの作成なので依然のものよりもハードルが高いが、良いものができるようがんばる。

ワシントン到着

リザルツ国際会議が開催されるワシントンに無事に到着した。現地で白須代表にも会えて一安心。
私にとってアメリカ渡航は今回が初めてで、ワシントン DC の街並みの第一印象としては、とにかく大きくて白い建物と人慣れしたリスが多いということ。日本に帰国するまでにもっと知りたいと思う。
明日からの会議はいよいよ本格的なものになるようなので、少しでも多くの知識と経験を得られるように気を引き締めていく。

電通さんの靴とかばんがエスンバの子どもたちに

日本リザルツの白須と長坂は国会議員の先生方、イボンヌ・チャカチャカさんらとともに、ケニアを訪問し、エスンバ村でスナノミ症抑止に向けたキャンペーンを行った。その際、電通さんが届けてくださった運動靴と、手さげかばんをエスンバの子どもたちに届けてきた。可愛い子どもたちの写真とともにお伝えする。

貧しく、靴もかばんも買えないエスンバの子どもたち。特に、新しい手さげかばんは大人気。
日本リザルツの活動にご協力くださった電通さん、本当に有難うございました。

釜石生活 80 ～弁護士相談会～

7 月 15 日（土）14 時から「弁護士相談会」を実施した。前回の 5 月から、多田創一弁護士に担当いただいている。先日、復興釜石新聞に多田先生の記事が出ていた。

復興釜石新聞 6月21日(水)

多田弁護士 4代目所長に

被災者の力になりたいと決意

相談者の方からも「あ、先生、新聞見ました」と声をかけられていた。
平成 29 年度（4 月～平成 30 年 3 月）中に、奇数月に弁護士相談を 5 回、偶数月に臨床心理士相談を 5 回行う。時には相談者が少ない月もあるが、利用者からは「こういうの、本当にありがたいです」との声をいただいている。定期的に開催していくことを続けていきたいと思う。

ナイロビ生活 vol32 ″イボンヌさん掲載記事″

ケニア 17 日の夕方、ケニア中のテレビには、スナノミ症に感染した子どもたちと、涙を流す、アフリカの歌姫、イボンヌチャカチャカさんが映し出されていた。その日の新聞にも。各メディアはこのイベントを取り上げ、掲載している。
ケニアの全国紙 Daily Nation のデジタル版

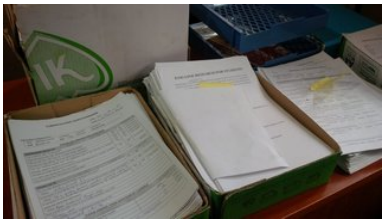
YVONNE CHAKA CHAKA IN KENYA TO PROMOTE FIGHT AGAINST INFECTIOUS DISEASES
またこちらもケニアの全国紙 Standard のデジタル版

‘Princess of Africa’ Yvonne Chaka Chaka in tears after visit to Vihiga County
これらだけではなく、数多くのメディアに取り上げられ、こちらでも把握できておりません。
そのため、メディア各社に掲載された新聞記事・映像等を日本リザルツケニアオフィスに送るようにお願いしている。カンゲミの CHVs からは、「カンゲミのローカルラジオで聞いた」と言われ、びっくりした。

2017 年 07 月 21 日

ナイロビ生活 vol33 ″エンドライン調査の分析編″

ケニアオフィスでは、プロジェクトの総括として、エンドライン調査と最終報告書作成の真っ最中。特にエンドライン調査は、カンゲミ住民を対象として 10,000 サンプルの収集を目標と掲げ、CHVs とスタッフ一丸になって、取り組んでいる。私も参加し、カンゲミの生の声を集めている。時には、「日本リザルツね。知ってるよ。世界結核の日のイベントに参加したよ。」と言ってくださる方もいれば、「知らない。」「結核は治らない」と言われることもある。その際には「まだまだ足りないな」と感じている。その結果、カンゲミ保健センターにも山のようにアンケート用紙が届けられ、オフィスにもどんどん運んでいる。



（まだまだ一部分…）
いよいよ、プロジェクトも大詰め！気を引き締めて頑張る。

2017 年 07 月 22 日

Action Partner Meeting

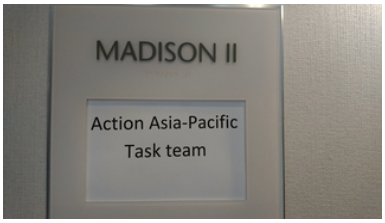
ワシントンのホテルの一室で行われたリザルツ全体の国際会議。ケニアが先陣を切り、ドイツ、イタリアからも活動報告が行われた。その後、TB（結核）チームと Nutrition（栄養）チームに分かれ、それぞれの国がどのように活動に取り組んでいるかを話し合った。話し合いにはイボンヌ・チャカチャカさんも参加された。日本リザルツは、栄養改善の前にライフラインさえ危うい人々に起きている問題について提起した。ワシントンに来る前に視察した、エスンバ村のスナノミ症で苦しむ人々について情報共有した。ひどいスナノミ患者さんの写真に目をそらす仲間もいた。

bracはバングラデシュでの実践を紹介し、一つ一つの問題解決のためには、広い視野を持って「貧困」や「栄養」、「ジェンダー」等の様々なテーマを統合して考える必要があると話していた。
午後からはGFF(Global Finance Facility)、UHC(Universal Health Coverage)、Transition のチームにそれぞれ分かれ、日本リザルツはUHCのディスカッションに参加。2030 年に向けての計画とTICADの成果物をふまえて、次のステップについて各国で意見を出し合った。また、ニューヨークから UNICEF の山口郁子氏がいらして、リザルツメンバーの Hannah、Allan、白須と共にポリオアドボカシーについて話し合った。

2017 年 07 月 23 日

7 月 22 日ワシントン国際会議

午前中は Action Asia Pacific Meeting に参加し、インド、韓国、オーストラリア、日本を中心にリザルツインドネシア設立に向けての話し合いを進めた。また、インドの TB(結核)予防プロジェクトのために、アジア開発銀行から資金を調達して、成果を上げていきたいとの意見もあがった。 Conference Kickoff では世界中からリザルツのドナーが集い、熱気溢れる大歓声の中で各国が紹介された。日本チームは、用意していたザンビアの故ウィンストン・ズルさんとアフリカの歌姫イボンヌ・チャカチャカさんのプラカードを掲げ、盛大にアピール。隣にいらしたイボンヌさんも一緒に立ち上がり、会場は歓喜に包まれた。



その後は Capital for Good & Action Meeting で、Geneva Global のクリスタさんを招いて財団とリザルツの連携に関して情報交換を行った。RESULTS Japan Meeting では、会計上の打ち合わせを行った。

日本人の参加は珍しいので、遠いところからようこそ！と歓迎の言葉をかけてくれる人もいた。

実はこの時、何気なく私たちの前の席にいらしたのは、リザルツの創設者、サム・ディリー・ハリス氏。
一緒にお写真を撮らせていただいた。

笑顔を絶やさないイボンヌさん

ウィンストン・ズルさんのプラカードをアピールする白須代表。

第三回：夫婦のコミュニケーション講座

先日は、第三回目の「夫婦のコミュニケーション講座」を開催した。遠方から来てくださった方もいらっしゃり、とても嬉しく思う。少しずつ内容もブラッシュアップしており、その時々に仕入れた情報などを講座に組み込んでいる。今回は、青木先生が翻訳された「離婚家庭の子育て～あなたが悪意ある元夫・元妻に悩んだら～」を一部参考にさせていただいた。この本では、離婚の際に、子どもが忠誠葛藤という、父母の間に立たされて、どちらかを選ばないといけないと感じるときの葛藤が書かれている。これは、子どもにとって酷な話で、どちらかを選んだらどちらかを捨てないといけないということだ。そうすると子どもは、自分の考えを放棄し選んだ親に追従し、自分で考えたり感じたりする力を押し殺してしまう。
また、父母のどちらも選べたことを知った際には、罪悪感にかられ、自己肯定感にも影響を与えることでしょう。
ところで、どちらかを選ばないといけないような状況がなぜ起こるかと言うと、それは共同養育する親に要因がある。それは、夫婦間の嫉妬や怒り、そして子どもが居なくなったり一人でいる不安や孤独感、子どもへの罪悪感などの気持ちを、「自分は子どもに好かれている親だ」と感じることで、それらの気持ちを和らげようとするからだ。そこで何が起こるかと言うと、あいての悪口や欠点を子どもに言ったり、面会交流を妨害したりする。このようにして子どもを自分の方に依存させ、相手との関係を切ろうとする。

その際、子どもの気持ちとは関係なく、かつ子どもが自ら選ばせたようにする。残念ながら、自身の行動や気持ちを客観視したりコントロールができずに、子どもに忠誠葛藤を招くような言動を取られる親も少なからずいる。こちらの本は、そのような元夫・元妻に悩まされている方向けの本になる。本の中には、そのようなケースへの対処法や子育ての仕方など書かれていて、参考になった。
三回のコミュニケーション講座が終わり、次は親の離婚を経験した子どものグループの開催を考えており、クラウドファンディングで皆さまへのご協力を募るかもしれませんが、その際は何卒よろしくお願いしたい。

2017 年 07 月 24 日

7 月 23 日ワシントン国際会議

本日は第 12 代世界銀行総裁のジム・キム氏が訪れ、各国の代表たちと Action Leader Group Meeting を行なった。会議終了後は、世界最大 NGO、brac の設立者ファズレ・ハサン・アベッド氏、RESULTS の事務局長を務めるジョアン・カーター氏と共に登壇した。ジム・キム氏は、途上国でエイズ支援をしていた経験があり、話の中で現地の深刻な現状についても触れていた。また、RESULTS の行っているアドボカシーの重要性についても言及していた。

会議終了後一緒にお写真を撮らせていただいた。

午後からはビル＆メリンダゲイツ財団の方と代表たちの間で、Gates/Action Meeting が開かれた。

会場では多くのリザルツグッズが販売されていた。

また、本日のセッションの中の一つにドキュメンタリー映画鑑賞会があったので参加した。映画の中には本日のスピーカー、ジム・キム氏のエイズ支援の映像もあり、痩せこけて絶望に満ちた表情の多くの患者が、長期の健康プロジェクトで健康になり、笑顔になっていく様子が映し出されていた。なんと驚いたことに、このセッション

のゲストスピーカーのメルキアデス・ワァヤ氏はその患者の一人であり、一人の命を救うことが後に世界に大きい影響を与えると身に染みて感じた映画鑑賞会となった。

[近日開催]Gavi ワクチンアライアンス特別セミナーのご案内

日本リザルツは Gavi ワクチンアライアンスのキャンペーン事務局をしている。
さて、8 月 1 日（火）午後 2 時より、Gavi ワクチンアライアンスにて長年資金調達担当上級マネージャーを務められている北島千佳様が、ワクチン接種の重要性と Gavi ワクチンアライアンスの取り組みについて講演下さることになった！北島様は普段ジュネーヴで活動されており、貴重な意見交換のチャンスとなっている。
詳細は以下の通り。

日時：8 月 1 日（火）14:00-15:00
場所：日本リザルツオフィス
http://resultsjp.org/about/access
講演者：Gavi ワクチンアライアンス　北島千佳資金調達担当上級マネージャー
内容：ワクチン接種の重要性と Gavi の役割

---

7 月 27 日世界トイレ革命　松井三郎先生ご講義

日本リザルツでは各 NGO や国際機関などと共に、世界トイレ革命を始動している。世界トイレ革命に関連し、7 月 27 日（木）松井三郎先生（京都大学名誉教授）の講義が日本リザルツ事務所で行われる。日程は以下の通り。
講師：松井三郎先生（京都大学名誉教授）
内容：エコサントイレなど世界的なトイレ普及活動について
場所：日本リザルツ事務所
開催日時：7 月 27 日　13 時 30 分～14 時 45 分

7 月 24 日ワシントン国際会議

今朝は Leadership Meeting を通してディレクターたちが集まり、各国の団体が抱える課題や数多く取り組んでいるプロジェクトの優先順位についてなど、包括的な問題について話し合った。10 月に東京で開かれる GGG+についても言及された。スタッフ全員で協力し、有意義なイベントになるように努めていきたい。

これまでの会議を通して、国によってプロジェクトの進め方に大きい違いがあるように思った。日本リザルツは一つのプロジェクトの進行に関して、「いつまでに達成する」という具体的な期限を決めて素早く取り組んでいく。対して、他国のリザルツの取り組み方はフレームワークから細やかな問題点まで視野に入れ、きっちりと見極めてから取り組んでいく。それぞれのやり方の違いはあるものの、一つの組織がこうして結集し、Face to Face で話し合うことでお互いのことを知り、また疑問をぶつけ合う機会は大切だと思う。また、日本人のインターン生である私の質問にも真剣に耳を傾けて聞いてくれようとする姿勢は、アドボカシーで普段から人の心に訴えかける活動を行っているという証拠だと感じる。

午後の会議に参加されるというイボンヌさんにばったりお会いした。

これからジュネーブへと旅立つ白須代表を見送りに来てくれたジョアン・カーター氏

夕食のためユニオン駅に向かう途中、議会議事堂の付近で雨が降る中アドボカシー活動を行っている人々を目の当たりにし、力強さを感じた。

雨の後には大きな虹が。

2017 年 07 月 25 日

「複十字」No.375 にニプロの岩佐氏の寄稿

結核予防会が発行している機関誌「複十字」No.375 に日本リザルツと交流のあるニプロ株式会社　医療システム開発部長　岩佐昌暢氏の「ニプロの結核への取り組み」と題した寄稿が掲載されている。内容はニプロさんの結核診断システム開発について、その中に日本リザルツの名前も記載いただいている。
尚、「複十字」No.375 には日本リザルツの前理事長の島尾忠男先生が、WHO 世界禁煙デー賞を受賞された記事もあった。

ニプロの結核への取り組み

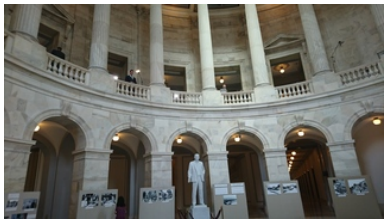
東北の子どもたちの声

日本リザルツ新聞 10 号を担当するにあたり、岩手県で家族を失った子どもたちの支援を行う元養護教諭の方にお話を伺っている。ご自身も震災を体験されたとのことで、一つ一つの言葉に重みがあり、頂いた資料に圧倒されるばかり。震災当時 0 歳から幼稚園児だった子どもたちの中には、自分の気持ちを言葉で表現することの難しさから、様々な行動でつらい気持ちを伝えようとする子どもがいる。また、寂しさ、悲しみ、そして、その気持ちを分かってくれない周囲への不信感を、怒りや身体の不調として表す子どももいる。支援する中で大事にしていることは、子どもの回復力を信じ、『一歩ずつ前進したい』との希望を子どもから引き出していくことだそうだ。詳細は、日本リザルツ新聞 10 号で報告させていただく。

7 月 25 日ワシントン国際会議

いよいよ大詰めを迎えた国際会議。本日はキックオフミーティングが議員会館で開かれた。リザルツの活動に協力的な三名の国会議員が勢いのあるスピーチを行い、メンバーの士気が一斉に鼓舞された。中でも、イギリスの国会議員、ニック・ハーバート氏はリザルツメンバーと共にケニアに渡航したことがきっかけで、人生観が大きく変わったそうだ。

画面から見て左から、スーザン・コリンズ氏（米）、シャーロッド・ブラウン氏（米）、ニック・ハーバート氏（英）



議員会館のホールはたくさんのメディア関係の人々が立ち並んでいた。
その後各々のチームに分かれ、ミーティングが開かれた。私は日本リザルツスタッフとして、オーストラリアリザルツメンバーにお願いし、ワールドバンクへ同行。職員の方のご厚意で中を見学させていただいただけでなく、ワールドバンクが行うプロジェクトのプレゼンを聴かせていただいた。そのうちのテーマの一つが「男女平等の重要性」についてで、男女差別が貧困問題に実は直接関わっているというものであった。実際に、男女の平等性が高い地域ほど所得も高いらしい。まだまだ知らないことがたくさんあると実感した会議だった。このような機会で新しい知識を吸収できることは新鮮で楽しい。

ワールドバンクの建物内はゆとりのある空間で清潔感がある。一度はこんな場所で働いてみたい。

会議終了後はホテルで盛大なレセプションが行われた。

ワシントンで様々な経験を経て、大変有意義な時間を過ごせたと思う。明日はいよいよ帰国する。

日本政府、「出国税」を検討？＞「国際連帯・貢献のための出国税」こそ必要

7 月 19 日 NHK テレビが「観光財源確保に日本出国時の課税など検討」という報道を行った（他の大手メディアでは報道されていないようだが）。内容は「…政府は、観光分野の政策を充実させる新たな財源の確保が必要だとしていて、…日本を出国する人に課税する新たな税を創設する案が検討されているということです。この中では、航空機や船舶の料金に上乗せして徴収する方法などが検討されています…」というもの。

●課税の仕組みは航空券連帯税などと同じだが…

「あれ、これは航空券連帯税や乗船券連帯税とどう違うのか？」と思われるでしょうが、課税の仕組みは（国際線航空や国際クルーズ乗船利用者の）出国時に徴税するということで、まったく同じ。違いは、その税収の目的と使途にある。出国税の目的は我が国の観光財源確保であり、使途は観光インフラの整備だ。連帯税の目的は地球規模課題の財源確保であり、使途は途上国の貧困・感染症や気候変動対策。

●出国税をすべて我が国の政策のために使うのは無理がある

出国税で上がる税収をすべて我が国の観光インフラに使うのはたいへん問題だ。理論上、国際航空運賃や国際クルーズ乗船賃への課税は、主権国家の権限が及ばない領土外の消費行為に対する課税

となるので、これを（すべて）特定の国家の歳入と見なすのは無理があると言えるだろう。
つまり、理論上は特定の国家のためではなく（無国家状態である）国際社会のために使うべきものだ。（下記の金子宏・東京大学名誉教授の論考を参照）。

●課税対象は訪日外国人が多数となるが、外国人の納得を得ることができるか

日本政府は、2020 年までに訪日外国人旅行者の数を 4000 万人に増やす目標を掲げているが、出国日本人は増えたとして 2000 万ほど（2016 年約 1700 万人）、出国税を払う人は圧倒的に外国人が多いことになる。その場合、確かに日本の観光インフラ整備は観光を目的とする訪日外国人にとっても便益を受けることになるが、観光客にとって一過性のイベントであり、なぜ日本の国家だけに払わなければならないのかということで納得しずらいものがあるのではなか。つまり、観光インフラ整備は日本がもっとも利益を得るのであるから、観光客から税金を取るのではなく、日本の国家財源で行うべきである、と。むしろ、地球規模で拡大する感染症対策にするとか、途上国支援のための気候変動対策にするとか、という名目の方が外国人にとって納得できるものではないだろうか。そうなれば「出国税」は限りなく「連帯税」的要素になっていくと思う。「国際連帯・貢献のための出国税」ですね。ちなみに、今年 3 月公表された外務省の「国際連帯税を導入する場合のあり得べき制度設計及び効果・影響の試算等」委託研究でも「出国時課税」を（メイン）ではありませんが、検討している。出国税の所管となる内閣官房（または国土交通省）は連帯税的要素から出国税を捉え直すべきだ。

（報告：田中徹二グローバル連帯税フォーラム・日本リザルツ理事）

【金子宏・東京大学名誉教授「人道支援の税制創設を」（2006 年 8 月 3 日付日本経済新聞）**】**

我が国の消費税を含め、各国の付加価値税制度では、国際航空は領土の外の消費行為であるため、その運賃は課税対象から除外されている。…国際航空運賃に対する課税は国家の領土主権の外で行われる消費行為に対する課税であるから、その税収はこれを徴収した国家の歳入とされるべきではなく、国際社会のために使うべきである。

2017 年 07 月 26 日

釜石生活 81 ～釜石よいさ 2017～

この頃はほぼ毎日、夕方になるとどこからともなく青葉ビルの活動室に人が集まり、「釜石よいさ」の踊りなどを練習する声や太鼓の音が聞こえ始める。「釜石よいさ」、それは、1987 年。製鐵所の高炉の火が消え、元気がなくなっていた釜石を盛り上げようと、市内の若手が立ち上げたおまつりだそうだ。

東日本大震災で一時中断したが、2014 年に復活した。跳んだり跳ねたりのエネルギッシュな踊りと「サーッサ、ヨイヤッサ」の威勢のいい掛け声が特徴。女性陣が優雅に踊る姿は、よいさ小町と呼ばれるそうで、短い夏を力いっぱい楽しもうという東北の人々のエネルギーを感じる。本番は、8 月 5 日（土）16:00~、青葉ビルのすぐ近くに特設ステージができるとのこと。1 万人の人出と言うことは、3,5 人に 1 人は見に行くということで、すごい盛り上がりだ。

釜石生活 82 ～子どもの気持ち 学習会～

6 月 15 日に実施した「親と死別・離別した子どもの気持ち 学習会」プログラム A に続いて、8 月 22 日（火）にプログラム B を開催する。プログラム A と B で完結するので、チラシも兄弟、姉妹のような雰囲気にしてみた。

プログラム A では、喪失とは何か、喪失がもたらす変化とは、喪失はなぜ辛いのか、等について学び、喪失を経験した子どもたちがどんな精神世界に生きているかを考えた。プログラム B では、喪失を経験した子どもにどう寄り添うか、等について学べるかと思う。講師は引き続き、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構の特任准教授で臨床心理士の佐々木誠先生。震災から 6 年 4 か月が経過したが、喪失による悲嘆からの回復のスピードもプロセスも環境も一人ひとり違う。学習会で学んだことをベースに、まずは一人ひとりのお話しをじっくり聴くことが大切と思う。

アドボカシーペーパー講座

7 月 27 日、スーパークリエイターの池田紀子先生をお招きし、アドボカシーペーパー講座を開催致した。本日のお題は、結核抑止。久保内事務局長も含め、全員でアドボカシーペーパー作りに挑んだ。実際に作ってみると、意外と難しく、悪戦苦闘。表面的ではなく、自分が問題をしっかり理解していないとペーパーが作れないことを実感した。事前の下調べが重要で、また、相手を惹きつけるためには、遊び心

も大切ということも仰っていた。池田先生は、大量の情報を読み込み、瞬時にペーパーを完成させていく。講座を通じて、改めて先生の凄さを実感した。池田先生、ありがとうございました。

トイレ大革命講座に出席して

今日、7 月 27 日午後からは京都大学の松井三郎教授がいらっしゃり、「エコサントイレ」に関する講義をして下さいました。ただトイレを建設するだけでなく、トイレから出たし尿や糞に灰を混ぜて、肥料を作るという仕組みを作っている点が印象的だった。また、化学肥料よりも、エコサントイレでできた肥料のほうが作物の育ちもよさそうだ。何より、オーガニックだそうで、一連の仕組みがうまく循環するようになり、トイレが世界にもっと普及するといいなと思った 1 日でした。

日本リザルツでの勉強会

本日は勉強会三昧の日でした。午前はアドボカシーペーパーの作り方、午後は途上国でのエコトイレについてです。

アドボカシーペーパーは、ペーパーを作ることも勉強になりますが、講師から他スタッフへの指摘事項を聞くだけでも非常に参考になる。1枚の紙だが、そこには多くの情報から導き出された裏付けがあり、手に取ってもらうための工夫も大事になる。今後、電車の中吊り広告をみる視点も変わりそうだ。
後半は、エコトイレの勉強会。ただトイレを設置するだけでは置物になってしまいます。排泄物が肥料になること、肥料により作物が大きく育つこと、そして、収穫した作物を高く売ることで現金収入が得られること、それらの経験を通じてはじめて、エコトイレを使う習慣が確立されるそうだ。また、エコトイレは農村部限定の取り組みであることも、自己完結するプロセスを知ることで納得できた。貴重な勉強の機会を本当にありがとうございました。

アドボカシーペーパー作成講座

本日は朝一から結核抑止についてのアドボカシーペーパー作成講座が開催された。スタッフ達は頭を捻りながら懸命に作成し、池田氏の講評を受けて、さらに完成度の高いものを作成した
アドボカシーペーパー作成については、内容についての理解、見せ方の工夫、遊び心と様々なことに注意して作成する

講座

本日午後、松井三郎先生の「世界トイレ革命」講座を受講しました。世界にはまだまだトイレが普及しておらず、特にまだ普及していないのが、東南アジア、特にアフリカだそうです。エコサントイレを普及させるのは、農業地帯に向けてのことだそうですが、話しを伺っていて、日本も 50 年以上前の地方では糞尿を畑の肥料として使用していたことを思い出していた。

世界トイレ革命-松井三郎先生による講義

世界トイレ革命に関連し、本日松井三郎先生をお招きし、講義が行われた。参加者は合計 20 名弱でした。トイレを途上国で普及させることは並大抵のことではなく、先進国で、日本の滋賀県で下水工事をすると一人あたり約 100 万円かかるそうです。そのようなことは途上国では不可能に近い。ましてや、
アフリカでそのようなことは気の遠くなる時間を要するか不可能に近いかということで、
そこでし尿と便を分けた自然還元型のトイレ、エコサントイレが活躍します。

トイレを作るには工事費、工事を行う人件費だけで格段に安いのだそうだ。だから、現地の人を巻き込んで普及させられるトイレなのだそうだ。エコサントイレ建設の際は、外部から援助を受ずに自分たちで行い、トイレ自体は、地元の人が負担して、し尿分離トイレから得た肥料で育てた農作物を売ることにより利益を得ている。したがって、長いスパンでみるとエコサントイレを建設することは、建設費用も回収でき、その家庭の糧になるのだそうだ。また化学肥料で育てたトウモロコシ収穫量と、し尿分離によって収穫されたトウモロコシ収穫量では、し尿分離によって収穫したトウモロコシ収穫量の方が 3 倍も高く収穫できるらしい。また、アフリカの土地は痩せていて、肥料を使用するよりも、し尿から得た肥料を使用する方が、土の質もよ

くなるそうだ。

アフリカでは、し尿分離型のトイレによって得た肥料による農作物生育の作業を特に女性に教えており、それが女性がお金を稼ぐ手段となり、女性の社会的地位も上がり、また子供たちにも教育費を渡しやすくするシステムが構築されており、単純に衛生状態をよくするだけではないという。

今日は本当に勉強になった。機会があれば、ご一緒に何かやりたい。

連続セミナー

本日は、2 つのセミナーに参加した。
1 つは、池田講師によるアドボカシーペーパーの作り方
前回の続きだったが、実際に作るのは初めてでしたので、右往左往しましたが何とかできた。他の方の作品を見ると、瞬時にしっかりと調べて情報を載せていて、工夫もされていて驚いた。
2 つ目は、松井先生による、世界トイレ革命講座。
日本では一人当たり 100 万円ほどの費用を掛けて下水の工事をしていることに驚いた。私たちの便利さは、とても高価なものの上にあるようです。そして、アフリカでは、簡易トイレを作るだけでなく、尿や便を利用して作物を作り収入増加にまで繋げるというのには感心した。周辺への環境汚染を防ぐことや衛生改善にも役立ち、ぜひ広まってほしい活動だ。

トイレ革命(エコトイレ)

今日、トイレ革命を目指す上で、トイレに係わる様々な状況や活動についての貴重な話を聞かせていただいた。講師は京都大学名誉教授の松井先生、もう1枚の名刺には何故かしら「いばらき大使」、多分何かのご縁で、矢張りトイレに係わることなのかと勘ぐってしまう。当然のことながら話題は糞・尿が中心になった。、現在の日本にとっては、後処理は自治体に任せてしまうが、昔は農産物の生産（肥料）にとって、大切な役割を担っていたとお聞きし、感謝しなければならないと思った。
先生がケニアなどで手掛けられているエコサントイレのシステムは、まさにエコであった。トイレの構造もレンガと木材、糞の処理には木灰(微生物が細菌を処理)、更にこの糞尿を肥料として利用している。この発想も元を辿ると日本など東(南)アジアらしい。アフリカの諸国では一般的に、糞尿は忌避されるべきものとして扱われているらしい。従って見た目も、匂いも全く別物の肥料に生まれ変わっても、余り恩恵を感じていただけない不遇な糞・尿たちである。しかしこれが農産物の生産向上、商品としての現金収入更に農作業に携わる女性・母親の支援に結び付いてくる。途上国での支援には、支援を受ける側の自立が一つの目標であり、継続性を担保する仕組みも整えて上げる必要がある。
主催側のリザルツスタッフだけでなく、参加いただいた外部からの 11 名の方々も、トイレ革命に更に関心を持たれたと思う。

ナイロビ生活 vol34'雑感'

本日は 7 月 27 日。プロジェクト終盤です。

ここでプロジェクトの背景や事業内容を振り返り、雑感を書き記してみようと思う。案件名は「ナイロビ市のスラム居住区におけるコミュニティ主導の結核予防・啓発活動の拡大支援事業」で英語だと「Scaling up Community-led Responses to Tuberculosis in Slum of Nairobi, Kenya」と表現れさる。

ケニアにおける結核の現状

ケニアは WHO が指定する結核高負担国 22 カ国の一つであり、2012 年の罹患率は 10 万人当たり 272 と世界で 13 番目に高いと報告されており、結核対策は急務の課題となっている。

カンゲミにおける結核の現状

カンゲミは人口約 5 万人が生活する、スラム居住区である。社会的地位の低さから保健医療サービスへのアクセスが悪く、人口密度も高いことから結核負担が高くなっていると指摘される。カンゲミにおける結核患者の正確な数は把握されていないが、2015 年にカンゲミ保健センターで登録している患者数だけでも 235 とされ、（国の平均有病率 272／10 万（136／5 万））カンゲミは、ナイロビの中でも結核の負担が最も高い地区の一つである。

カンゲミ唯一の公的保健医療施設である「カンゲミ保健センター」には、プロジェクト開始以前、結核クリニックが併設されているが、保健省の予算不足から、結核診断室の屋根が壊れ、患者の待合場所が、同保健センターの入口に面しており、感染予防及び患者のプライバシーや人道的配慮の観点から、結核クリニック専用の待合室を設けることが急務であった。また、カンゲミでは 4 つの CU（コミュニティユニット）に各 20 名の CHV（コミュニティ・ヘルス・ボランティア）が設置されており、無給ながら強い責任感と義務感を持ち地区の保健衛生環境の向上に取り組んでいる。しかし、彼らは通常保健戦略ガイドラインに則って採用、3 日間の研修を受けて活動するが、養成体制の整備不足のために十分な研修を受けていなかった。特に結核に関する専門的な知識には乏しく、未治療患者の発見、結核啓発・教育活動はできずにいた。

事業内容

そこで本事業では、以下の 4 点を実施した。

1. カンゲミ保健センターに併設されている結核クリニックの施設改修
2. CHV 及び CHEW を対象として結核予防・啓発活動の技術研修
3. 上記の研修で習得した技術を生かした、CHV 及び CHEW に結核予防・啓発活動の拡大及びモニタリング
4. 事業の成果を図るための調査の実施及び結果の活用

つまりカンゲミ唯一の公的保健医療施設の設備を強化し、コミュニティレベルで活動を行っていた CHVs の活動を、さらに拡大し効果的なものにするために、研修を行い、活動のモニタリング、それを評価、今後の活動に活用しようという一連の流れがある。（と私は理解しています。）

「対象地域のスラム居住区の住民の間で、結核の発見率・治癒率が向上し、新たな発症が阻止されることを目指す」と言う上位目標はどれだけ達成できたのか、それを分析し数値化するのが、

現在、「カンゲミ 1 万人アンケート」と題してプロジェクトの認知度・満足度調査を行っている。現在（27 日）、7,000 以上のアンケート用紙が回収され事務所に山積みになっている。また、小倉先生の訪問によって、CHVs のモチベーション・やる気も向上してる。結核の経験があり結核予防・対策に関して高い意識を持って、プロジェクト開始時にもやる気があふれていた CHVs ですが、やはり日々生活に困窮している彼らにとって、保健省職員にすり寄って媚を売っているように見えることもあるが、安定した収入を得られるのが望みのようだ。時には「日本リザルツで雇ってくれ」と直接言われることもあった。しかし、昨日開催したフォローアップ会合の際にはそのようなものは一切感じず、「本当のボランティア精神」が育ってきていると感じた。
昨日のフォローアップ会合後には、CHV の活動維持のための募金箱が会場の隅に設置され、多くの方が寄付していた。設置した CHV に聞けば、「これは CHV の中でも、患者さんを施設に連れて行くためにお金が必要な人、また CHV でも仕事がない人と仕事がある人がいる、それをチームとして支えあうためのもの」「私は昨年末の会合のときから寄付を募っているけど、最近は 10 倍以上の寄付金が集まる。絆と言うか、団結力が強くなっている」と話してくれた。また CHV 会合でエンドライン調査への協力依頼をした時、即座に「OK やろう。1 人 200 名にアンケートすればいいだけだ、確かに多いが 2 週間あればできる。」と言ってくれた方もいた。CHV の中にはその提案に、疑問を感じている人もいたが、CHV 同士で励ましあい、支え合っている場面をよく目にする。
同じことに向かって、同じ経験をしていると、絆が生まれる。それを目の当たりにしている。CHV が絆を感じて、チームとして活動できている、今だからこそできることがたくさんあると思う。今年度の事業の中でより多くのことができるようにしたいと考えている。

アドボカシーセミナー

前回アドボカシーペーパー作成の基本を教わったこともあり、2 回目の今日は池田講師から、完成度を高め最終稿のつもりで作成されたいと、私にとっては初稿でも最終稿でも、Power Point なる道具をいかに使いこなすかが先に立ってしまう。それでも前回の講義内容でペーパー作成のポイントに多く気付かされたにも拘らず、今回更に説明の言葉数は前回より少なかったものの、暗示の部分に深く考えさせられたようだ。人への発信は、自分の専門外であればなお更、いかに惹きつけ楽しさをにじませ主旨を分からせるか、と思っている。残念ながら私のセンスが追い付くにはまだ回数をこなさないといけない。

2017 年 07 月 27 日

ワシントンより帰国

本日、無事に日本へ帰国した。心強いサポートをしていただいた皆様、ブログを読んでいただいた皆様に心より御礼申し上げます。

出張先では、書類の調達や通訳などにも挑戦させていただき、責任のある仕事をこなすことで成長できたように思う。一方で、自身の語学力不足や、現地のリサーチ不足などの反省点も多く、その分新しいことをたくさん学べた。次回は海外へ出る前に、語学力や知識を向上させてさらに充実したものにしたい。

2017 年 07 月 28 日

ナイロビ生活 vol35 ″″

今週、今年度最後のフォローアップ会合、マルチステークホルダー会合を開催した。フォローアップ会合は、各ユニットごとに、以下の議題について話し合う場だ。

1. Challenges: 各 CHVs が現在抱えている問題点をあらいだす。

多くの意見があった中で一番重要だと感じたものは、医療従事者のストライキ。カンゲミを含むナイロビ市郡では、医療従事者がストライキを行った。しかし、カンゲミ保健センター、結核クリニックでは、CHVs は活動を続けた。患者を結核クリニックに連れて行こうとしても、対応できる医療従事者がいないという事態が発生した。しかし、その事態を知ったセンター長シカンダ氏の判断で 1 日 1 人の保健省職員を保健センターに派遣していた。さらに、興味深かったのは、CHVs 同士で患者がどこに住んでいるのか共有することが難しいという意見。ある CHV が話していたのは、「あの患者は明日薬を受け取らなければいけない日であるが、行ってくれるか分からず、連れてくる必要がある。しかし私は仕事があって難しい。では、同じユニットの CHV に頼もうとしても、それができない。」ということだ。なぜかと言うと、カンゲミには住所がなく、道も入り組んでいるため、他の CHV がその患者宅を見つけることができないことがあるということ。特に「Self-stigma(内なる偏見)」を持っている患者の場合、外出することが少なく、近所の人に尋ねても知っている人がいない可能性があるとのこと。

2. Achievement:3 カ月の間に達成することができた成果を報告。

各ユニットの代表者がプレゼンテーションを行い、カンゲミ保健センターの方々からコメントをもらう。

3. Best Practice:どのような活動が一番効果的であったか。

全ユニットで声が上がったのは、School health(学校保健)と清掃活動で、学校の先生方からの評価も非常に高かったように感じる。

4. Way of improvement :問題点に関して、改善する方法案を提案。

5. Way forward:今後の活動について、話し合う。

「もっと Door to Door の訪問を増やそう」「学校ベースでの活動をもっと企画しよう」と様々な声が上がり、

私からも「CHVs 間での情報共有をもっと増やし、お互いに協力し合える体制を整えよう。」と提案した。定期的にこのような会合を開催することで、モチベーションの向上や CHV 同士の信頼関係の構築、ボランティア精神の育成につながっていると感じている。

2017 年 07 月 29 日

ドーラの世界一周旅行記

そういえば、霞が関周辺で魔法使いを見ない…、そんな疑問をお持ちの方もいらっしゃるのではないだろうか。魔法使いドーラおばさんこと、代表の白須は、現在世界一周アドボカシーの旅に出ている。なんと、7 月 12 日から 8 月 6 日まで 24 日間にもわたる長旅。7 月 12 日に出国し、まずはケニアへ。国会議員の先生、イボンヌ・チャカチャカさんと感染症抑止イベントを行った。そのまま、19 日からはワシントンへ。ワシントンでは、リザルツ教育基金の会議に出席。各国の代表を相手にし、熾烈な「議論」の戦いを繰り広げてきた。なんと、世界銀行のジム・キム総裁との 1 時間ほどのミーティングにも出席し、ジム・キム総裁も横浜の TICAD で白須が会ったことを覚えてて下さったそうだ。その足で、25 日からはジュネーブへ。現在、WHO や Stop 結核パートナーシップの幹部の方々に対して、積極的なアドボカシー活動を実施している。
そろそろ帰国か？と思ったみなさん。まだまだ続く。8 月 1 日からは再びケニアを訪問。国際保健の権威である某有名教授の方と、ポリオに関する調査を行ってくる。何と盛りだくさんな世界一周旅行でしょう！ドーラがいないなら、オフィスは静かだろうと思っているそこのあなた。残念ながら、ドーラの携帯は全世界で使用可能。チャットのようにメールが飛び交い、職員をヒーヒー言わせているのは相変わらずなのだった。

[明日開催]Gavi ワクチンアライアンス特別セミナー

皆様、いよいよ明日開催を迎える。

8 月 1 日（火）午後 2 時より、Gavi ワクチンアライアンスにて長年資金調達担当上級マネージャーを務められている北島千佳様が、ワクチン接種の重要性と Gavi ワクチンアライアンスの取り組みについて講演下される！

2017 年 07 月 31 日

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン栄養アドボカシー担当者へのインタビュー

先週、栄養改善に共に取り組んでいるセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン栄養アドボカシー担当者に、2016 年世界栄養報告セミナーに関するインタビューをお願いし、ご協力頂いた。このインタビューは、日本リザルツ新聞 10 号に掲載する予定。世界栄養報告書とは、各国の栄養改善に向けた進捗状況や課題を明らかにするとともに、政策提言としてまとめている報告書。その日本語版完成披露のために毎年開催されているのが、世界栄養報告セミナー。